
戦いの果てに

川本流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦いの果てに

【Nコード】

N8509D

【作者名】

川本流華

【あらすじ】

戦争を終わらせた英雄は、ただ疲れ果てていた。なぜ戦わなければならなかったのか、その果てに何を得たのかを物語る。

英雄

これは十三世紀のある大陸の話。火薬がまだほとんど用いられていない時代、欧米のとある国で革命を企む者によって国王が暗殺される事件が勃発した。これを機に王国は国王軍を形成し満十八歳以上の男子に徴兵の義務を課した。そして、革命軍との全面戦争へと発展していった。しかし十年後、この戦争は国王軍から生まれた一人の英雄の出現によって終幕を迎える。

戦争が終結して、城下町はすでに三日間も宴が行われていた。今日は英雄ラウルの帰還ということもあり、町の人はいっそう派手に賑わっていた。

日が沈む頃、一人の門兵が慌てて城下町の中へ駆けて来た。

「ラウル様たちが帰って来られたぞ」

それを聞くなり町の人たちは一斉に声を上げた。

「息子が帰ってきた」

町の人々はラウルの帰還と息子の生還を喜びながら城下町の入り口へと駆けていった。

国王軍の兵士たちが次々に城下町への門をくぐると、鼓膜が破れんばかりの大歓声が上がった。

「おお、息子よ。顔を見せておくれ」

「ただいま」

兵士たちは各々の家族と抱き合い、その生還を祝った。そして、ラウルがその姿を見せたときその盛り上がりは最骨頂を迎えた。

「ラウル様！」

「我らが英雄ラウル様！」

「ラウル！ ラウル！ ラウル！」

ラウルは兵士としては華奢なほうであったが、人一倍威圧感を放つ

ていた。ラウルが顔を向ける度に、その方の町の人は一瞬ビクついたが、城内にラウルが入り、姿が見えなくなるまで、ラウルの帰還を喜んだ。

ラウルは一度もその歓声に応えることなく、振り返ることさえしないで城内へと入っていった。

「ラウルは大変疲れているんだ。だから今は休ましてやって欲しい。では、宴を続けてくれ」

ラウルの無作法を詫びるように一人の兵士が間を取り持った。そして、再びラウルの元へと駆けていった。

「おい、ラウル。一言くらいあつたつていいんじゃないか？」

ラウルはため息混じりに首を横へ振った。

「レンブラン、何と言えればいい？ 俺はただの人殺しだ」

レンブランから視線を外すと、ラウルは城内の角にいる人影を見つめた。

そこにはひっそりと一人のシスターが立っていた。

「知り合いか？」

「……ああ」

レンブランが問いかけると、ラウルは小さくうなずいた。

「俺とカイを育ててくれた人だ」

ラウルはシスターに深々と一礼した。シスターは手を合わせ、涙を浮かべながら優しく微笑んでいた。おかえりなさいという声が聞こえた気がして、ラウルは思わず涙を溢した。

（シスター、俺はカイを……）

ラウルは齒をかみ締めると、足早に城の奥へと入っていった。

城内は城下町とは打って変わり、人も少なく閑散としていた。

「俺たちの部屋が変わっているらしいぞ。戦果を称えて大きな部屋になっているらしい」

「そうか」

終始暗い面持ちのラウルを見て、レンブランまでも気を沈ませた。

「いつまでも暗い顔をするな。お前がどのように思おうと、この国

にとってお前は戦争を終わらせた英雄だ」

レンブランはラウルの肩を叩いた。しかし、ラウルは表情を変えることはなかった。

「じゃあ、俺は自分の部屋に行くよ」

レンブランは息をつくとき、手を上げて去っていった。

しばらく歩くと、見知らぬ女性が立っていた。年齢は十代だろうか、まだ幼さ残る彼女は、ラウルを見るなり優しく微笑んだ。

「ラウル様でいらっしゃいますね。私はこの度ラウル様のメイドとしてお仕えることになりましたユウと申します。掃除や食事など身の回りの世話をさせていただきます。とりあえず、新しい部屋にご案内させていただきます」

ユウは深々と頭を下げた。そして、ラウルを先導して歩き始めた。

「……ちよつと待ってくれないか。俺には称えられる荣誉なんてない。メイドなど必要ないし、部屋も前のままでいい」

ラウルは躊躇いながら言うと、勝手に前の部屋へと歩き出した。

「お待ち下さい。前のお部屋はすでに他の方が入られております」

「そんなことは知らない。その者には退いてもらう」

ユウはラウルを必死に静止したが、ラウルは聞く耳を持たず、足早に前の部屋へと向かっていった。

「そんなことしたらその人の部屋が無くなっちゃいますよ」

「俺の新しい部屋に行けばいいさ」

ラウルは前の部屋に着くと、勢いよく扉を開けた。

「よ、よお。どうした？ 良い部屋だな。気に入ったよ」

部屋に入ると、そこにはソファーでくつろぐレンブランの姿があった。

「……あ、いや」

ラウルはただ言葉を無くし、部屋の前で茫然と立ち尽くした。その様子を見て、ユウはクスクス笑った。

「さあ、新しいお部屋に行きましょう」

ユウは勝ち誇った表情で言うと、ラウルの腕を引っ張って新しい部

屋へと連れて行った。

新しい部屋は大きくなっているだけでなく、寝室はもちろん、バスルームからキッチンまでついており、また、あらゆる物が新しく質の良いものになっていった。

「部屋の件は認めるにしてもメイドは本当に必要ない」

ラウルが言うのを聞くと、ユウは眉をピクリと動かした。

「今度は私の仕事をお奪いになられるのですか？」

ユウが冗談混じりに返すと、ラウルは困った顔をして頭を掻いた。

「今日はもう寝る」

ラウルは諦め、寝室の方へと歩いて行った。

「思ったより優しい方なのですな」

ユウは小声で呟くと、寂しい目つきでラウルの背中を見つめた。

「明日は十時から元老の方たちのお話があるそうなので、八時に起こしに参ります」

ユウは頭を下げると、静かに部屋を後にした。

元老とはこの国の地主によって構成されている者たちであり、国王への政策を打診する役割を持つ者たちである。国王亡き後、事実上この国を統制しており、徴兵制度を課した上に本人やその親族の多くは徴兵を免れたこともあり、兵士たちからは大変な不快感を持たれている。

翌朝、時間通り八時にユウは部屋を訪ねた。すると、ラウルはすでに起きており着替えを済ませていた。

「あら、お目覚めでしたか？　すぐに朝食を作りますね」

ユウはそう言うと慌てて食事の準備をし始めた。

「食堂で食べるから必要ない」

ラウルは冷たく言い放つと部屋を出て行った。ユウはふくれ顔を浮かべ、渋々部屋の掃除に取り掛かった。

ラウルが食堂に着くとそこにはレンブランの姿があった。

「おはよう」

「ラウル、部屋にキッチンがあるんじゃないのか？　てっきりあの

メイドが作ってくれるものだと思っていたが……」

レンブランは驚きを浮かべた。

「こっちの方が性に合っているからな」

ラウルは軽く微笑みながら答えた。そして、朝食を取るとレンブランの正面に座った。

「あのメイドも可哀想に。せつかくラウルの好きな物を調べたのに食べてもらえないんだから」

ラウルはたちまち首を傾げた。

「どういうことだ？」

ラウルは食事を口に運びながら、レンブランに聞き直した。

「昨日の夜に聞きに来たんだよ。聞かれたのは俺だけじゃないようだぞ」

ラウルは一瞬決まりが悪い表情を浮かべた。

「次からは自分の部屋で食べるよ。昨日も言ったが、ラウルはこの戦争を治めた英雄なのだから、一般兵と同じ扱いというわけにはいかないだろう」

ラウルはスプーンで食器を鳴らすと、少し寂しそうな顔をした。

朝食を終えると、レンブランは席を立った。

「たまには一緒に食べよう。ユウに、あのメイドに言うておくから」
ラウルが顔を窺いながら言うと、レンブランは笑顔でうなずいた。

「ああ。……さて、俺は戻って支度するよ。俺も元老の連中に呼ばれているんだ」

レンブランは食器を片付けると、食堂を出て行った。

ラウルも食事を終わると部屋へと戻った。部屋の扉を開けると、昨晚脱ぎ散らかした衣服は洗濯されており、広い部屋のほとんどが掃除されていた。

「あ、おかえりなさいませ」

ユウの笑顔に出迎えられると、ラウルは照れくさそうに頬を掻いた。

「紅茶が飲みたい」

無愛想に言うと、ラウルはソファアに座り本を読み始めた。

「はい」

ユウは笑顔で答えると、すぐに支度をし始めた。しばらくして出された紅茶はラウルの好きな銘柄の物であった。

「ありがとうございます」

ラウルの言葉を聞くと、ユウは笑みを浮かべ再び掃除に取り掛かった。

しばらくすると、ユウがラウルに声をかけた。

「もうすぐ十時ですので集会場へお行きください」

ラウルは本を閉じると、一気に残りの紅茶を飲みほした。

「ああ」

ラウルは相変わらず無愛想に一言とだけ言って出て行った。しかし、そこには優しさが感じられ、ユウは複雑な顔をした。

(お兄ちゃん、この人……)

ユウは頭を下げる振りをして、静かにうつむいた。

部屋を出てしばらくすると、レンブランが待っていた。

「さて、行こうか」

「ああ」

レンブランが言うと、ラウルは力強くうなずいた。そして、二人で集会場へと向かって行った。

二人が集会場の入り口まで着くと、ラウルは重々しい扉を叩いた。

「入りなさい」

中から声がするのを聞いて、二人は扉を開いた。すると、そこには7人の元老が大きな円卓を囲んで座っており、その横には側近が数名立っていた。

「何用ですか？」

ラウルが無愛想に尋ねると、何人かの元老はあからさまにため息をついた。

「まあ、座りなさい」

中央に座っている人物は優しい口調で話しかけた。彼の名はジェスといい、元老の長である。過去に戦場へとその身を投じたこともあ

り、ラウルたち兵士の気持ちも理解してくれる、元老の中で最もまともな人物である。

二人は彼の正面に設けられている席に座った。すると再びジェスが口を開いた。

「率直に言おう。この度の功績と市民の信頼を考慮した結果、ラウルには新しい国王、レンブランにはその補佐官としてこの国のために尽くして頂きたい」

レンブランはあまりに突然のことであっけにとられていた。しかし、ラウルはある程度想像していたのか、険しい目つきのままだった。

「お断りします。功績といっても大量殺戮。それに信頼なら貴方にも十分ある。今回の件で人を殺していないだけ、貴方の方が国王に相応しい」

ラウルは冷やかな顔つきで返答した。そして、席を立ち上がると、出口へと歩き始めた。

「お前が気を病んでいるのは大量殺戮ではなく親友殺しだろ」

後ろから二人をあざげ笑うような声が出た。それを聞くなりラウルとレンブランは、殺気を放ちながら振り返った。

「止めないか、アーヴァン」

ジェスはすぐさま静止した。アーヴァンとはジェスの一人息子であり元老の一人でもある。

アーヴァンは薄ら笑みを浮かべ続けた。

「言わせてください、父上。こいつは親友であるカイを自らの手で殺めたことを悔いているのです。確かに親友をも殺す非情な罪悪人より父上のほうが国王に向いているでしょう。そして、いずれは私が……」

「貴様」

レンブランは剣を抜こうと柄に手をかけた。しかし、ラウルはその手を止めた。

「止める、レンブラン」

ラウルが歯を喰い縛りながら言うと、レンブランはラウルの気持ち

を察し、手を降ろした。

「それが利口だ。もし私に斬りかかっていたら側近の二人に返り討ちにあつていただろう。この二人は王国の武道界一、二を争う手だれだからな」

アーヴァンは再び薄ら笑みを浮かべながら口を開いた。

「我々を甘くみるなよ。我々は寸止めの武道ではなく戦場での殺し合いを生き抜いたんだ。その気になればその者たち如き一瞬で斬り捨てよう」

レンブランは睨み付けるように言った。すると、集会場内は重い空気が張り詰めた。

「止めると言っているだろう、レンブラン。行くぞ」

ラウルは怒鳴り声を上げると、レンブランを引っ張るようにその場を後にした。

「馬鹿者」

ジェスはアーヴァンの頬を叩くと、慌ててラウルたちの後を追った。アーヴァンはその背中を睨み付けると、元老の一人に目を遣った。

「待ってくれ、ラウル」

その声を聞くと、ラウルたちは立ち止まって振り向いた。

「国の代表が腐敗していれば誰が国王になったところで何も良くなりはない。国王を決める前にやることがあるのではないですか？」
ラウルは落胆しながらジェスを見ると、再び歩き出した。ジェスは重い言葉と人を威圧するラウルの雰囲気を目の前にして何も言えなかった。同じ戦時下を生き抜いたレンブランでさえ、その身を振るわせた。

ラウルは部屋の扉を勢いよく開いた。

「おかえりなさいませ」

ユウはラウルを笑顔で出迎えた。しかし、ラウルの放つ重々しい空気にユウは一瞬言葉を失った。

「昼食の前に少しお休みになられますか？」

戸惑いを浮かべたユウだが、再び笑顔で尋ねた。ラウルはユウの笑

顔を見て、少し気を落ち着かせた。

「ああ、目が覚めたらご飯を頂きたいから、部屋に居てくれ。自分の部屋のようにくつろいでいてくれていいから」

ラウルは精一杯優しい口調で言うと、ラウルは寝室へと足を運んだ。

「はい」

ユウは満面の笑みで答えた。

始まり

夕陽が穏やかに照りつける丘の上、一本杉の下には二人の青年が立っていた。

『ラウル、俺たちはいよいよ明日、軍に入隊することになる』

『ああ。平和を築くために頑張ろうな、カイ』

哀愁漂う雰囲気の中、二人は夕陽を見つめた。

『……万一、戦場で俺が敵の手に落ちそうになった時にはその手で俺を殺してくれないか？』

『まだ兵士にもなっていないのに、何言っているんだよ。縁起でもない』

ラウルは眉間にしわを寄せた。

『万が一だよ』

カイはごまかすように笑って見せた。しかし、その瞳は哀しみに帯びていた。ラウルは仕方なしにうなずいた。

『……わかった。でも、逆の立場になった時にも同じようにしてくれよ』

『ああ』

二人は約束の証として十字架を熱し、互いの腕に焼け印を付けた。

丘のふもとから一人の女性が歩いてきた。

『さあ二人とも、晩御飯の支度ができたわよ』

『はい、シスター』

二人はシスターの方へと駆けていった。そして、二人はシスターと腕を組むと、三人は寄り添うように仲良く丘を下って行った。

修道院に着くと他の子供たちが出迎えてくれた。最後の夜ということもあって、いつもより豪華な食事であった。

食事が済むといつも通り皆で賛美歌を歌い、わいわい騒いだ。

いつの間にか夜が更けていった。いつもと変わらない平和な夜であった。

二人は夜中、みんなが寝ているうちに出て行くことにした。

『そろそろ行こうか？』

『……ああ』

二人は静かに身支度を済ませると、静かに扉を開けて出て行った。ふと、門の所に目をやるとシスターが立っていた。どんなに暗くてもどんなに遠くても二人にはそれがシスターだとわかった。

『必ず生きて戻ってきてくださいね。それと、これをお守り代わりに』

二人はシスターから首から掛けるロケットを受け取った。中には以前三人で撮った写真が入っていた。裏には、親愛なる子供たちへ、と刻まれていた。

『……今までありがとう』

二人はシスターに抱きつくと、堪えきれない涙を流した。シスターもまた涙を流しながら二人を強く抱きしめた。

二人は長い間シスターにしがみ付いていた。

「もう、行かないきゃ」

カイはやっとの想いでシスターから離れた。そして、ラウルの肩を掴むと、優しく引き離れた。

「行こう、ラウル」

「……ああ」

二人は涙を拭いながら、一度も振り返ることなくその場を後にした。月光の下、シスターはいつまでも祈りを捧げた。

午後も一時が過ぎた頃、ラウルが目を覚ますと昼食の支度がされていた。

「おはようございます。もうすぐ昼食ができますから、少しお待ちいただけますか？」

ユウの声を聞くとラウルはゆっくりと起き上がった。

（夢か？）

ラウルは大きく伸びをしながら食卓へと向かった。食卓には多くの

料理が並んでいた。

「これ、全部作ったのか？」

ラウルは目を丸くしながら尋ねた。

「はい。初めて食べて頂くので張りきっちゃいました」

ユウは微笑みながら答えると、紅茶を差し出した。そして、洗い物を済ますためにキッチンへと向かった。

「こんなにたくさん、一人では食べ切れない。もし、昼食がまだなら一緒に食べないか？」

ラウルはしばらく食卓を見回した後、ユウに食事を勧めた。

「はい」

ラウルの言葉が余程嬉しかったのか、ユウは赤ん坊のように純粹な顔をした。その微笑むユウを見て、ラウルは心穏やかになった。

ユウの笑顔が自分の心の傷をどれ程癒してくれているか、ラウルは必然的に悟っていた。

二人は黙って食を進めた。ラウルにとって戦時中でも一人での食事というものは少なかったが、敵襲がない状態での食事は久しぶりであり、幸福な一時であった。

「御口に合いましたか？」

食事を終えると、ユウは恐る恐る尋ねた。すると、ラウルは手を止めてユウを見た。

「ああ、おいしかった」

ラウルは穏やかに笑った。

「やっと、笑顔が見られましたね」

ユウは嬉しそうに言うとうユウは食器をまとめてキッチンへと向かった。

ラウルは一息つくくと、ソファーに横たわり本を読むことにした。

これを機に二人は、穏やかで温みのある日々を過ごして行った。食事は部屋で採るようになり、多くの日はユウと共に食べた。

時折レンブランを部屋に招くと、一緒にご飯を食べた。そして、そんな生活が一月経った。

「そういえば、先日掃除をしていたらこれがベッドの下から出て来ました」

ユウは何やらポケットから取り出した。それは、いつの間にか無くなってしまい、ずっと探していた、徴兵の時にシスターからもらった写真入りのロケットであった。

「ありがとう」

ラウルはそれを受け取ると、中の写真を見た。そして、棚にあるもう一つ同じ、しかし、ひどくひしゃげたロケットを手に取ると悲しげな表情を浮かべた。ユウもその雰囲気を感じてか、静かに立ち去ろうとした。

「……誰だか聞かないのか？」

ラウルは哀しげな声で尋ねた。ユウが振り返ると、ラウルは思いつめた顔をしてユウを見た。

ラウルはなぜかユウに全てを話そうと思った。もちろん、話したところで多くの人を殺したこと、親友を殺したことの何ひとつ変わることもない。しかし、ただ聞いて欲しかった。全ての罪を洗い流せるかのような笑顔を持つ一人の女性に話すことで懺悔をしたかった。

「どなたなのですか？」

ユウもまたそれを受け入れた。何ひとつ変えることなどできないけれど、全てを聞きたいと思ったからである。そして、これこそが彼女の最大の目的であった。

孤児から兵士へ

城下町に入ると、ラウルとカイは物珍しげに辺りを見回した。二人は以前シスターに連れられ、買い物に数回来たが、買い物を終えたらすぐに帰ってしまったため、ゆっくり見て回ったことがなかった。

「すごいな。お祭りのような華やかさだ」

「ああ。人の数もすごい。この一瞬で今まで見てきた人の数を裕に超えたな」

通商などの影響もあり、城下町は人でごった返していた。二人は目が回りそうになりながらも城門前へと行き着いた。

「でかいなー」

カイは城を見上げると、あ然とした。明らかに場違いな二人を見つけると、門の前に立っていた兵士が歩み寄った。

「そこの者。兵士になりきたのか？」

門兵に声を掛けられると、二人はたちまち恐縮した。

「は、はい」

「中で受付を済ませろ」

兵士の指示を受けると、二人は頭を下げて城の中へと入っていった。二人は受付を済ませると、広場で待たされた。周りには自分たちと同じ年齢くらいの人たちが集まっていた。

しばらくすると、胸に勲章をつけた一人の兵士が一段高くなっているところへと上った。

「若者たちよ、よくぞ集まった。実際に訓練に移る前に諸君の能力を調べさせてもらう。格技場へ移動せよ」

ラウルとカイは指示に従い、格技場へと歩いていった。

「今から適性検査を行う。各自で検査用紙を貰って全ての項目を検査し、係りの者にサインを貰うように。そして、全て終わったら再びここへ来て用紙を提出せよ。それと引き換えに各自の部屋の鍵を

配布する」

指示を聞くなり、二人は用紙を取りに行った。

二人が用紙を受け取ると、そこには視力、聴力などの身体能力から瞬発力などを測る運動能力、そして狙撃力や剣術、武術から知力など幅広く細かいことが記載されていた。

「これ全部一日でやるのか？」

カイはため息混じりに呟いた。

「ぼやいても仕方がない。早いところ回ってしまおう」

ラウルはカイの肩を叩いた。そして、ラウルたちは歩きだした。

検査は城の敷地内の至る所で行われており、城に入ることが初めての二人には回るだけでも一苦労であった。その上、剣術や武術、知能検査などの慣れないことの連続で心身共に疲れ果てていた。

やっとのことで全ての項目を終えた二人は格技場へと戻り用紙を受付へと持って行った。

「随分疲れた顔をしているな。この程度のことですら参っていたら、日々の訓練なんてついて行けないぞ」

受付の兵士は厳しい顔つきで言うと、鍵と紙をラウルたちに手渡した。

「部屋の鍵と適正検査の結果がでるまでの訓練日程だ。結果によって各々の能力にあった部署へと分かれてもらう。そこで戦場に出て行けると判断されるまで訓練し、各々戦場へ行くこととなる。何か質問は？」

兵士に尋ねられるとラウルたちは互いの目を見合わせた。

「いえ、ありません」

ラウルが代表して答えると、受付の兵士は無愛想うにうなずいた。二人は兵士に一礼すると、二人は部屋へと歩いて行った。

二人は右往左往しながら、やっとの思いで部屋を見つけた。部屋は四人一部屋制で、二人が部屋に着いたときには既に他の二人が部屋にいた。

「お、来たな。俺はクリス。宜しく」

二人が部屋に入るなり、百九十センチ以上ある大柄な男は笑顔で握手を求めた。

「俺はラウル」

「俺はカイだ。宜しく」

二人が挨拶をすると、検査で疲れ果てていたのか、ベッドで横になっていた男が鈍い動作で起き上がった。

「私はレンブラン」

「軟弱な奴だな。あの程度の検査でへとへたになりやがって」

クリスは豪快に笑いながらレンブランの背中を叩いた。

「止めるよ、痛いな。あの程度の検査？ バカを言うな。俺は今日

一日で一生分動いた気がするよ」

レンブランが腰を抑えながら言い返すと、クリスは指を刺しながら笑った。しかし、立っていることがやっとのラウルとカイは笑えずにいた。

「……よろしく、レンブラン」

「あ、ああ」

四人は代わる代わる握手を交わした。そして、一通り挨拶が済むと四人でそれぞれの子供の頃の話に華を咲かした。気がつくといつの間にか四人は寝てしまっていた。その寝顔はどうみてもまだ幼さ残る少年であった。

次の日から新兵たちは朝昼晩ひたすら基礎体力、基礎筋力の向上のための訓練をさせられた。食事も喉を通らぬほど走らされ、箸も持てぬほど筋肉を酷使させられた。

「いつまで続くんだ？」

「ずっとだろう」

ラウルが呟くと、カイはラウルに肩を貸しながら答えた。カイは日に日に訓練に慣れていき、一週間ほど経つと体がほとんど痛まらずにいた。

二週間が過ぎたある日、一日の訓練が終わった後で、新兵たちは

格技場へと集められた。そして、皆が集まったのを見計らって一人の兵士が口を開いた。

「検査の結果が出た。各自自分のものを採れ。明日からしばらくの間は今までの基礎トレーニング朝と晩に行い、昼は適性検査の結果をふまえて訓練をしてもらう。その内容、場所などは結果の用紙に記載されているとおりだ。何か質問は？」

ラウルが用紙に目を遣ると、細かな分析がされていた。

検査結果によって新兵たちは各自の能力に合わせて、武術専門の前線兵士、銃撃・弓など遠距離専門の遠距離兵士、策略を練る策士の三つに分けられていた。

「ありません」

新兵たちは口をそろえて答えた。

「では、解散」

兵士が言うのと、新兵は各自部屋へと戻っていった。

「ラウル、お前は何になった？」

カイが尋ねると、ラウルは自分の用紙をカイに手渡した。

「策士だ」

「……そうか、俺は前線兵士。分かれてしまったな」

苦笑を浮かべながらカイは言った。

「じゃあ、カイは俺と一緒に、ラウルはレンブランと一緒にだな」

ベッドで横になっていたクリスはゆっくりと起き上がった。

「そうか、全く別々にならずによかった。あんな訓練一人だったら気が狂う」

ラウルが言うと、レンブランと二人でうつむいた。

「……明日も早いから寝よう」

レンブランはそう言うのとベッドに倒れこんだ。

「策士組は一段とお疲れのようだな」

静まり返った部屋でクリスは笑いながらカイに話しかけた。

「あの訓練じゃ、仕方ないさ。さて、俺たちも寝よう」

カイは息をつくのとベッドに入った。クリスは喋り足りなそうな表情

であつたが、渋々ベッドで横になった。

翌日から予告どおりの訓練が始まった。ラウルたち策士組の訓練は、情報の解析や戦略の練り方などが主で、他に狙撃の訓練も行われた。一方、カイたち前線兵士組は実際の武器を使った実践が主であり、基礎トレーニングとは比べものにならないほどの激しい、命がけの訓練が課せられた。

一年が経つと、四人はそれぞれの才覚を表し始めた。上官たちは当然四人に目をつけ、他の新兵とは違う訓練を課すようになった。カイは戦士としての頭角を現した。

そして、二年が過ぎ去った。

いよいよ四人は戦場に派遣されることとなった。

早朝、四人は揃って広場に集められた。

「昨日、革命軍の本拠地クールガンの北にあるクシヤ村も革命軍の支配下となった。よって、本来二年の訓練期間とは実に短いがお前たち四人も戦場へ派遣されることとなった。カイとレンブランは革命軍の本拠地を目指している。班、ラウルは革命軍に補給物資を送っていると思われるヴァーミン砦攻略のために、班、クリスは革命軍の退却ルート無くすために、班。各自準備ができ次第各々の集合場所へ行き、配属先へ向かうように」

「はい」

上官直々の伝達を聞くと、ラウルたちは部屋へと戻っていった。

戦争がより身近になり、四人は表情を強張らせた。そんな重苦しい空気の中、クリスが口を開いた。

「いよいよだな。いつかまた、どこかで逢おう。みんな少しは粘れよ」

「俺の剣を一度も取れなかつたくせによく言っぜ」

カイは冗談交じりで言うと、早々と荷物をまとめ始めた。

「もう行くのか？」

「ああ。ラウル、必ずまた逢おう」

寂しそうに顔を歪めるラウルに、カイは一言だけ告げた。そして、うつむいたまま足早に、振り帰ること無く部屋を出て行った。

「待ってくれよ、カイ。……じゃあな、ラウル、クリス」

レンブランは二人と握手を交わすと、慌ててカイの後を追った。

「必ず生きてまた逢おうな」

ラウルが大声で叫ぶと、二人は静かに手を振り去っていった。

「カイの奴、随分急いで出て行ったな」

「別れの時は長引くほど寂しくなるからな」

ラウルはシスターとの別れを思い出した。

「不器用な奴だな」

クリスの言葉を聞くと、ラウルは穏やかに笑ってうなずいた。

二人は別れを惜しむようにゆっくりと荷造りをした。

「……さて、俺もそろそろ行くよ」

クリスは荷物を肩に掛けると、ゆっくりと立ち上がった。

「ああ、元気で」

二人は握手を交わすと、クリスも静かに部屋を後にした。

「長引くほど寂しいか。……確かにな」

クリスは自分自身を鼻で笑うと、下を向いて歩いていった。

ラウルは空しさに駆られていた。誰も居なくなつた部屋で一人静かに残りの仕度を済ませると、静かに部屋を後にした。

戦禍

四人がそれぞれの道を進み六年が過ぎた。少し大人び、精悍な顔つきになったラウルは以前まで元老の側近を勤めていた上官と共にヴァーミン砦を包囲していた。

ラウルは捕まえた革命軍の兵士に砦の中の様子を聞き、突入できると判断した。

「わかった。全兵、突入の準備をしろ」

上官はラウルに誘導されるまま、兵士たちに命じた。そして、準備が完了すると、直ちに突入を命じた。

ラウルは兵士たちを率先して、砦内へと入っていった。

内部は崩壊しており、革命軍側はまともに戦える状態ではなかった。

「無駄に戦いたくはない。降伏しろ。すれば食糧を分け与える。しなければ二度と食糧を口にすることはないだろう」

ラウルが声を上げると、革命軍の兵士の多くは剣を捨てた。しかし、数人は未だ剣を持ち抵抗していた。

「抵抗はやめて降伏しろ」

「何が降伏だ。俺たちを奴隷にでもするつもりだろう」

「国のために働いてもらうことになるだろうが、奴隷のような扱いはしない」

ラウルは必死に説得したが、兵士たちは納得いかない表情で抵抗を続けた。

「では、なぜ戦争を始めた？」

兵士の一人は鬼のような形相で言い放った。ラウルは首をひねった。

「何を言っている？ それは、革命軍が国王を……」

「違う。私は知っている。国王暗殺は革命軍の仕業ではなく、げん……」

兵士が言い切る前に剣が左胸に突き刺さった。後方から現れた上官

は兵士を冷ややかに見下した。

「現在抵抗している者を処刑しろ」

「ま、待ってください」

ラウルは上官に駆け寄ると腕を掴んだ。

「ラウル、上官である私にたて突く気か？」

上官はラウルの腕を振り解くと、胸ぐらを掴んだ。

「しかし……」

「革命軍の戦意を奪うためだよ」

上官は得意気に笑うと、ラウルの肩を叩いた。すると、すでに抵抗していた兵士たちは斬り伏せられていた。ラウルはうつむくと、悔しさに唇をかみ締めた。

国王軍の兵士たちが砦に入って数時間、革命軍は一切抵抗の意思を示さなくなった。そして、砦は難なく墮ちた。

国王軍は直ちに捕虜となった砦内の人間食料を与えた。

「よくやったな、ラウル」

上官はラウルの肩を叩いた。

「早速だが、お前はこれから指揮官として、この部隊を率いてフォヤーズ村へ向かってくれ」

「上官は？」

ラウルが尋ねると、上官は胸を張った。

「ここを墮としたら昇進することが決まっている。戦場とはさらば、これからは城内でお仕事だ」

「それはおめでとうございます」

ラウルは必死に笑顔を作った。

「最後の最後で嫌な思いをさせてすまなかった。しかし、覚えておくべきだ。戦争には非常さと必要な犠牲というものがある」

ラウルは納得のいかない顔であった。それを察した上官も同様に表情を曇らせた。

「お前と戦えなくなるは心残りだが、無事を祈っているよ」

上官はラウルに握手を求めた。そして、ラウルは硬い握手を交わし

た。

「じゃあ、最後に他の者たちの様子を見てくるよ」

上官は再度ラウルの肩を叩くと、足早に去っていった。

ラウルがヴァーミン砦を攻略して数週間が経つ頃、ゴラン高原では国王軍と革命軍が対峙していた。

「突撃」

地響きをたてながら双方の兵士が剣を交えた。大勢の人間が命のやり取りをする中、一人だけ異彩を放つ男がいた。男は重々しい鎧を纏い剣一振りです数人をなぎ倒すほどの豪腕であった。この男の活躍でこの戦は難なく勝利を治めた。

「やったな、カイ」

レンブランが駆け寄ると、威風堂々とした、その男はゆっくりと振り返った。

「ああ」

カイは最前線で戦い、多くの功績を収めた。その戦果を認められ前線兵士にして指揮官となっていた。また、レンブランは策士として働きながらカイの補佐をしていた。

「次はフォヤーズ村の攻略だな。そして、その次はいよいよ奴等の本拠地シタデルだ」

レンブランは声を弾ませた。しかし、カイは遠目で空を見上げていた。

「早いところ終わらせて帰りたいな」

連戦でカイは心身共に疲れていた。レンブランはそれを悟ると、自分の気を静めた。

「そうだな。そういえば、フォヤーズ村でラウルが率いる「班」と合流することになった」

「そうか、それは何が何でも生き残らないといけないな」

カイは剣を収めると、ニッコリ笑った。

カイとレンブラン率いる「班」は近くでテントを張り、しばらく戦

の疲れを癒すことにした。

「……では、各自与えられた役割に移ってくれ。手の空いている時は休みだ。気を緩め過ぎぬよう、疲れを癒すように」

レンブランの指示によって、兵士達は水場を確保する班と食料を調達する班、周囲の見張りをする班に分けられた。

一通り役割をこなすと、兵士達は僅かな休息を得た。そこには剣と剣が交わる音もなく、地鳴りのような唸り声、足音もなく、葉と葉が重なり合う音、鳥の鳴き声などが静かに響き渡った。

そんな中、カイのテントでは、カイとレンブランの他に三名の兵士が招かれ、話をしていた。

「フォヤーズ村侵攻は三日後でいいか？」

レンブランがカイに提案すると、カイは深く考えた。

「……もう少し兵士達を休ましてやりたい」

カイは小声で答えた。

「気持ちはわかるが、勢いを断ち切りたくない。早めにしたほうがいいだろう」

「……そうだな。では、そうしよう。それより、例の件はどうなった」

カイが話を切り出すと、レンブランは難しそうな顔をした。

「内通者がいることは確かなのだが、なかなか尻尾を出してくれない。そこで、信頼のおける三人を監視官として兵士たちを見張らせる。不審な動きをする者がいたらすぐにわかるだろう。な、アクセル」

「はい」

監察官の代表を任されている者が答えた。

「わかった。では明日の朝、兵士達に侵攻の日取りを言っとしよう。」

監察官、大変だと思いが頑張ってくれ」

「はい」

監察官たちは声を揃えて答えると自分達のテントへと戻っていった。

明朝、兵士たちは高原に集められた。

「二日後の深夜にフォアーズ村に侵攻する。それまでは、ゆっくりしてくれ。武具の手入れ、体調管理などは自己責任で行うように」カイによる説明が行われた。

兵士たちは気を引き締め、顔を強張らした。

「寝るときには腹を締めまえて言え」

レンブランが横やりを入れると、兵士たちはドツと笑った。カイは忽ち呆れ顔を浮かべたが、かえってそれが兵士たちの笑いを誘った。束の間ではあるが、和やかな雰囲気に戻っていった。

「以上、解散」

カイがため息交じりに言うと、兵士たちは一斉に敬礼をした。

「はい」

兵士たちはしつかりと返事をする、自分たちのテントへと戻っていった。

限られた時間、水で身体を洗う者もいれば、大切な人に手紙を書く者、届いた手紙を読み直す者、各々自分たちの時間を過ごしていった。そして、瞬間に日が暮れた。

食事の後、監察官はカイのテントに呼ばれ、内通者に関する報告が行われた。

「……以上、五名が夜中に外出しましたが、特に不審な動きは見られませんでした」

アクセルによる報告が終わると、レンブランはため息をついた。

「しかし、今回革命軍の待ち伏せにあったことから内通者がいることは疑いようがない。明朝に準備をさせて昼までに出撃しよう。レンブラン、策は成っているか？」

カイはレンブランに尋ねた。監察官は突然の提案で驚き、目を見合わせた。

「ああ、大丈夫だ。急な話だが、それがいいだろう。監察官は今晩もその五名を中心に監察を続けてくれ」

「はい」

そう言うと、監察官達は自分たちのテントへと戻っていった。

「レンブラン、お前は監察官二名を監察してくれ。俺はアクセルを見張る」

「おいおい、あいつらは大丈夫だよ」

監察官はレンブランによって選ばれていたため、あからさまに不満な顔をした。

「念のためだよ」

カイはなだめるように優しく言った。

「……わかった」

レンブランが答えると、微笑みながらうなずいた。

「腹締まって寝ろよ」

レンブランがテントを出ようとすると、カイが笑いながら言った。

レンブランは不意をつかれ、目を丸めた。

「わかっているよ」

レンブランは笑いながら答えた。

兵士たちが寝静まり、監察官も自分達のテントへ戻った真夜中、

カイはアクセルのテントへと向かっていた。

カイがアクセルのテントを開けると、アクセルの飼っていた鳥が外へと飛び出していった。

「すまない。鳥を逃がしてしまったようだ」

カイは申し訳なさそうに言った。

「気にしないで下さい。どの道次の戦までには放そうと思っていますから」

アクセルは鳥かごの扉を閉めた。

「なぜだ？」

「束縛されるのは人間だけで十分ですから」

カイはアクセルの言葉に重みを感じた。

「では、なぜ今まで飼っていたんだ？」

「……必要だったからですよ。まあ、どうぞ座ってください」

「ああ」

カイは椅子に腰掛けた。

「内通者の件ですか？」

「ああ。その件も踏まえて質問したいことがある」

カイの言葉を聞くと、アクセルは身構えた。

「なんですか？ 今夜の様子なら他の監察官からの報告がまだですからなんとも言えませんよ」

「そうか。……ところで、お前の故郷はフォヤーズ村の近郊にある村だったな」

カイはアクセルの話にうなずくと、話を切り出した。

「ええ。しかし、記憶のないうちに母に連れられて城下町に移りましたので、故郷と呼べるかどうか」

アクセルはカイの前に腰を下ろした。

「その後、フォヤーズ村へ行ったことは？」

「ありません。……もしかして、私が疑われているのですか？」

アクセルは怪訝な顔で尋ねた。

「ああ。と、言うより疑われていると知っていれば不審なことでもできないだろうと思ってな。もっとも、すでに内通を行なった可能性もあるが」

カイは悪げもなく堂々と話続けた。

「実に不快です。私はフォヤーズ村には行ったことがないですし、知り合い一人いません」

「では、革命軍に知り合いは？」

「いい加減にしてください。明日は大切な戦だ。心を乱すような真似をどうしてするのです？」

アクセルは静寂の中、声を張り上げた。カイは大きく息をついた。

「……悪かった。戦の前だからこそ聞いておきたかったんだ。お前に背を向けて戦うためにな。そう深く気に留めるな」

カイはそう言うと、立ち上がり、アクセルの肩をポンと叩いた。そして、テントを後にした。

明朝、兵士たちは高原へと集められた。

「突然で申し訳ないが、今より二時間後にフォヤーズ村へ侵攻する」
カイによってフォヤーズ村侵攻の時間が変更されたことが伝えられると、兵士たちはどよめき、不満な表情を浮かべた。

「急過ぎやしませんか？」

一人の兵士が思わず不平を漏らした。

「当然の意見だな。今まで言わなかったが、ゴラン高原での戦を機に内通者の存在がはつきりしている。しかし、まだそれが誰かということまでは分かっていない。これは奇襲を奇襲とすべき作戦だ」
カイは加えて話した。兵士たちの間には、さらに多くのどよめきが起こったが、それ以上不満、不平の声はでなかった。

「レンブラン、作戦の説明をしてくれ」

カイは兵士たちが落ち着くのを見計らってレンブランに進行を促した。

「では、作戦を説明する。おそらく、革命軍は村侵入自体を防ぐため、ほとんどは南側にある入り口付近に集まる。そして、伏兵としてわずかに村の中に潜んでいるといった感じだろう。そこでまず、第一軍が突撃し、伏兵も含め、すべての兵士を村入り口におびき寄せる。後に、私を含む第二軍を補充、同時にカイ率いる十数名が西側から侵入。我々は革命軍の殲滅。カイたちは革命軍の旗を燃やし、我々国王軍の旗を付けてもらう。何か質問は？」

「旗を燃やし、付け替える意味は？」

一人の兵士が前に出た。

「フォヤーズ村の民の抵抗を無くすため、革命軍の戦意を損なわせるためだ」

レンブランが答えると、別のところから声が上がった。

「カイ様がいないと入り口付近の兵士達が不審に思うのでは？」

「兵士の一人にカイの鎧兜を着けてもらう。遠くからならカイではないと判りはしないだろう。他に質問は？」

質問も出なくなり静まり返った中、アクセルが一步前に出て手を上げた。

「カイ様の鎧、私に着けさせてください」
再びどよめきが起こった。

「危険だぞ。最も狙われる存在だからな」
レンブランが険しい顔つきで言うと、周りの兵士たちも相づちを打った。

「覚悟はできています」

レンブランはカイのほうを見て、指示を仰いだ。すると、カイは小さくうなずいた。

「分かった。……死ぬなよ」

カイはアクセルの目をまっすぐ見て答えた。

いよいよ戦が目前まで迫ってきて、兵士たちは心奮え、身体も震えていた。

「二時間後、再びここに集まれ。以上、解散」

レンブランが声を張り上げると、兵士たちは手を高々と上げた。そして、各々の足取りで自分たちのテントへと戻っていった。

仕度を終えると、アクセルはカイのテントへと向かった。

「アクセルです。鎧を預かりにきました」

アクセルはテントの前で返答を待った。

「入ってくれ」

「はい」

カイの言葉を聞いて、アクセルは中へと入っていった。

「その前にまず、内通者についての報告をしてくれ」

カイが尋ねると、アクセルは首を横に振った。

「その必要ありません。そうでしょう」

アクセルは真っ直ぐカイの目を見た。

「なぜ急に話をする気になったんだ」

カイは警戒しながら尋ねた。

「あなたは私が内通者であることを確信しているようです。これ以上隠していても意味がない」

「……そうか。では、なぜ内通なんて真似をした？　そして、なぜ

今回の作戦で最も危険なこの役を引き受けた？」

カイが尋ねると、アクセルは顔を上げた。

「戦争を終結させるためです。出来ることならば革命軍の勝利で終わらせたかった。ですが、どうやら無理のようです。ならば私の手で今回の戦の終結に一躍買いたいと思いました」

「どうして革命軍側に肩入れする？」

カイが重ねて尋ねると、アクセルはうつむいた。

「……それは今回の侵攻が成功したらお話しします」

アクセルが答えると、カイはため息をついた。

「今回の奇襲は洩れているのか」

隣にいたレンブランが尋ねると、アクセルは首を横に振った。

「いえ、情報は鳥を使って行いますが、前回の内通より鳥が戻ってきていません。ですから伝えられませんでした。……カイ様、いづから私に目を付けておられたのですか？」

アクセルは怪訝な顔をしてカイに尋ねた。

「確信を持ったのは高原の戦だ。作戦が洩れるのは、決まって鳥の鳴き声がしなくなった次の戦だった。それに、怪我もしていないのに脚に布を巻いている鳥が飛び回っていれば怪しく思うさ」

カイは穏やかに語った。

「……ばれないように夜中に逃がすようにしていたのによく分かりましたね」

「レンブランにも内緒で、一人の兵士に鳥を見張らせていたからな」
レンブランは驚いた顔でカイを見た。

「まず、味方からつてやつだよ」

カイは勝ち誇った顔をした。

「すつきりしました。この命、戦争終結のために命を捧げましょう
そう言つと、アクセルはカイの鎧兜を着け始めた。

約束の時間、兵士たちは既に集合していた。そこにカイの姿が見えると一気に士気が高まった。

「作戦は先ほど話した通りだ。皆、必ず生き残るように。特に第一

軍、いいな」

「はい」

第一軍は声を揃えて答えた。

「では、これよりフォヤーズ村侵攻作戦を開始する。全軍、出撃」
「オー」

全兵士が声をあげると、すぐさま隊列を組み、静けさ漂う高原を行進し始めた。

フォヤーズ村への侵攻も中盤に差し掛かると、カイ率いる十数名は西からの進撃のため別行動をとることとなった。

「レンブラン、後を頼むぞ」

カイはレンブランの肩を叩いた。

「ああ。そちらの作戦開始の合図は狼煙で知らせる」

「わかった。……アクセル、頼んだぞ」

アクセルは深くうなずいた。

カイは仲間を引き連れ、村の西側へと向かった。

しばらく歩くと、フォヤーズ村の入り口が見え始めた。革命軍の見張りも国王軍の侵攻に気づき、鐘令で指揮官に伝えた。

鐘の音を聞くと、すぐさま大慌てで革命軍の兵士たちが入り口に集まり始めた。

「突撃準備開始」

レンブランは直ちに指示を出した。兵士たちは隊列を組み直し、突撃に備えた。

「第一軍、突撃」

準備が整い次第、レンブランは続けて指示を出した。

奇襲で動揺している革命軍に地響きをたて、兵士達が押し寄せた。革命軍も剣を抜き、戦いに備えた。

双方の剣が交わり、火花を散らした。革命軍の指揮官は、後方にカイとレンブランの姿を確認すると、奇襲で押され気味の形成を逆転するべく、全兵士を入り口に集めるよう近くにいた兵士に指示を

出した。そして、一刻ほどすると装備を整えた革命軍の兵士が現れた。

「レンブラン様、まだですか？」

国王軍が次第に押され始めると、アクセルは焦りを浮かべた。

「まだだ」

レンブランは険しい目つきで戦況把握に努めた。

第一軍はすでに革命軍に囲まれていた。第二軍はレンブランの方を見て指示を待った。レンブランは指揮官を見ていた。

革命軍の指揮官が剣を抜き、戦いに加わった。

「第二軍、突撃」

レンブランはその様子を確認すると大声で指示を出た。そして、同時にカイへの合図である狼煙をあげた。

第二軍は地鳴りのような音を立て、各々の剣を抜いた。

人数的にも実力からしても戦線不利と判断した革命軍の指揮官は、カイとレンブランの首を優先して狙うように指示を出した。

狼煙が上がるのを見て、カイたちは西側からのフォアヤーズ村侵入を開始した。革命軍の姿はほとんど見えず、万事作戦通りに事が進むかと思われた。

革命軍の旗が立ててある見張り台の下に黒い鎧を纏った大柄の兵士がいるのが見えた。カイはその者がかかりの手だれであることを直感した。

カイと同伴していた兵士のうち三名が、黒兵士に斬りかかった。

「止せ」

カイが慌てて静止したが間に合わず、一瞬のうちに三人とも黒兵士に斬り捨てられた。すぐさま、他の兵士たちが斬りかかろうとしたが、カイが剣を横に伸ばし静止した。

「あいつは命に代えても我々で食い止めますので、カイ様は旗を目指してください」

一人の兵士は覚悟をして提案した。

「お前たちでは命に代えても食い止めることはできないだろう。俺がやる。お前たちは旗を目指せ」

カイは大きく首を振った。そして、ゆっくりと剣を抜いた。

「しかし、万一でもカイ様が死ぬわけにはゆきません」

「これは命令だ。従え」

カイの言葉からは覚悟が感じられた。

兵士たちは言葉を無くした。確かにこの中であの黒兵士と戦って生き残れるのはカイだけだが、命令とはいえそんな危険な目に合わせてよいのか分からなかった。

「行け」

考え込む兵士たちを尻目に、カイは強い口調で言い放った。そして、カイは黒兵士に斬りかかった。兵士たちはカイを信じ、従うことにした。

カイの振り下ろした剣を避けると、黒兵士はカイの背後へと回り剣でなぎ払った。それを鞘で受け止めたカイは、バランスを崩しながらも第二手を加えた。しかし、黒兵士は柄でその剣をとめ、一時距離を置いた。

息もつかせぬ攻防に兵士たちの足は竦んでいた。

「早く行け」

カイの指示を受け、兵士たちは一斉に見張り台を駆け上った。同時にレベルの高い攻防が再び行われた。

見張り台には革命軍の兵士が控えていた。

「何としても阻止しろ」

「駆け上がれ。旗を付け替えるんだ」

双方の声が飛び交うと、瞬間に剣が交じり合った。

国王軍の兵士たちは何とか敵を斬り崩し、旗を目指した。そして、旗のある場所へと辿り着くと革命軍の旗を燃やし、国王軍の旗をつけた。

「カイ様、完了しました」

一人の兵士が見張り台から身を乗り出すと、家の物陰からカイの方

を見ている人間がいることに気づいた。カイが狙われているものだと思います、兵士たちは急いで見張り台から駆け下りていった。

入り口での攻防は国王軍の勝利がほぼ確実なものになっていた。その上、革命軍の旗が燃やされるのを目の当たりにした革命軍は士気を削がれ、間もなく指揮官は降伏を宣言した。

レンブランはすぐさま数十人の兵士をカイの元へと向かわせた。そして、他の者には戦後処理を指示した。

カイと黒騎士は一步も譲らぬ攻防を繰り返していた。カイは何度か急所への斬り込みんだが、厚い鎧に妨げられ、致命傷を与えられないでいた。そして、渾身の一撃を額に当て、ようやくヒビを入れることに成功した。しかし、その瞬間剣を弾かれ足を払われた。

黒騎士はカイの額に剣を当て、少し止まった。一瞬躊躇しているようにも見えた。

「すまない、カイ」

黒騎士は小声でつぶやくと、強く決心したかのように剣を振り降ろした。その瞬間、一発の銃声が村中に響き渡った。銃弾は黒騎士の額に入ったヒビを打ち割り、頭部を貫いた。

兜が割れると、黒騎士はひざをついて倒れた。

表れた素顔を見て、カイは言葉を失った。兜の下から表れた顔は、共に修練を積み、共に苦痛を耐え抜いたクリスであった。

カイは倒れるクリスを抱え込むと、歯を食いしばり、涙をこぼした。

「大丈夫か、カイ」

銃弾を放ったのはラウルであった。

駆け寄ったラウルはカイが抱え込んだ男の顔を覗き込んだ。そして、言葉を失った。

「お兄ちゃん」

絶句する二人のもとに家の陰から泣きながら走り寄る少女の姿があった。少女はカイの手を払い、小さな体でクリスを抱え込むと、涙

溢れるその目で、ラウルを睨み付けた。

戸惑うラウルのもとに一人の女性が歩み寄った。

後方から一人の女性が歩いてきた。

「我が子クリスが無礼を働いたこと、深く詫びます。娘にもよく言い聞かせておきますので、この場はお引きいただけませんか？」

クリスの母は深々と頭を下げた。

ラウルとカイは互いに目を見合わせたまま、しばらく黙りこくつた。

「わかりました」

ラウルは答えると、カイの肩を叩いた。そして、二人は黙ったままその場を立ち去ることにした。

「厚かましいお願いかもしれませんが、クリスの埋葬は私たちにさせてください」

クリスの母は涙ぐみ震える声で願い出た。

「……お願いします」

ラウルは振り返ることなく頭を下げた。

入り口の方へとしばらく歩くと、ラウルたちはレンブランたちと合流した。

「ラウル？ 早い到着だったな。東から入ってきたのか？」

「ああ」

ラウルはうつむきながら答えた。

「カイ、やったな。我々の勝利だ」

笑顔で駆け寄るレンブランだが、ラウルたちの表情を見て困惑した。

レンブランは率いていた兵士たちに寢床の準備をするよう命じ、

ラウルたちの元へ歩み寄った。

「どうかしたのか？」

ラウルは大きく深呼吸をすると、レンブランに事のあらましを説明した。

「……」

レンブランもまた、友の死に言葉を失った。

「レンブラン様、兵士たちの寢床の準備が調いました。ラウル様とカイ様、レンブラン様は宿に寢床を手配しましたので、そちらをお使いください」

兵士の一人が報告に来ると、ラウルとカイは小さくうなずいた。

「わかった。兵士たちには今日は各々の場所で休むよう伝えてくれ。お前も休んでくれ」

レンブランはうつむきながら兵士に伝えた。

空気を読み、さっそうと立ち去ろうとする兵士をカイは呼び止めた。

「夜、アクセルに宿へ来るよう伝えてくれ」

「はい。わかりました」

兵士は返事をする、足早に立ち去った。

三人はとりあえず宿へと向かうことにした

約束

夜が更け、交代で見張りをする兵士の他は疲れた体を休ませていた。レンブランは兵士たちの様子を診回ると同時にアクセルを呼びに行った。

「アクセル、入るぞ」

レンブランは返事を待たずにテントの入り口を開けた。すると、アクセルは戻ってきた鳥にエサを与えていた。

「アクセル、カイが待っている。そろそろ宿のほうへ行ってくれないか？」

「わかりました」

アクセルは鳥かごを持つと、テントを出て行った。疑いの眼差しでレンブランが鳥かごを見ていることに気づくと、アクセルは笑みを浮かべた。

「かわいいでしょう。カイ様にも見せてあげようと思ひまして」

レンブランはため息をつきながら、頭を掻いた。

「俺は診回りをしてから部屋に戻る」

レンブランはアクセルが腰に携えている剣を没収すると、その場を立ち去った。

宿ではカイに呼ばれたラウルが、カイと共に部屋で休みをとっていた。

部屋の扉をノックする音が聞こえた。カイは念のために剣をとり、扉の前へと向かった。

「アクセルか？」

「はい」

カイが尋ねると、アクセルは静かに返事した。カイは剣を下ろし、扉を開けると部屋へと招き入れた。

カイの視線は鳥かごへと向いていた。すると、アクセルは鳥かごを目の高さまで持ち上げた。

「かわいいでしょう」

カイは鼻で笑うと、うなずいてみせた。

「約束どおり、なぜ内通行為を行ったかを説明してもらおうか？」

カイが尋ねると、ラウルは体を起こしアクセルに椅子を差し出した。アクセルは椅子に座ると、一息つき、事のあらましを説明し始めた。

「……一年前、隊に入隊して五年が過ぎたころ、両親と妹の家族三人が革命軍側の知り合いによって人質とされました。彼らは、私の配属された班の情報を提供すれば家族を優遇して扱う、提供しなければ殺すと脅してきました」

アクセルは鳥かごに目を遣った。

「伝達に鳥を使ったのは、私の村ではしばし急用の際には伝達鳥を用いて伝達する風習があるからです」

「なぜ、俺やレンブランに相談しなかった？」

カイは落ち着いた口調で尋ねた。

「相談したら家族を救えましたか？ 従うしかなかった」

アクセルは声を大にして言うと、そのままうつむいた。それに反応して鳥かごの中で鳥が羽をばたつかせた。

静かに見ていたラウルは冷静に尋ねた。

「家族はまだ人質に？」

「はい」

「彼らとの接触は一切事切れたのか？」

その問いの後にしばらく沈黙が続いた。アクセルは革命軍に就くべきか国王軍に就くべきか考えていた。

アクセルはカイとラウルの顔をじつと見ると、決心したように話し始めた。

「いえ、国王軍によるフォヤーズ村侵攻が成された場合、三日後の晩にコンサークル高原に来るよう言われています」

「伝達鳥を使えば高原に来る相手の人数、人物を特定できるか？」

ラウルが尋ねると、アクセルは小さくうなずいた。

「ええ」

アクセルの言葉を聞くと、ラウルは策を練りだした。

「では、家族を人質とした知り合いと今後の状況を話すため革命軍の策士の二名は来るように手紙を書き、この場で伝達鳥を飛ばしてもらおう」

「家族を救ってくれるのですか？」

アクセルはさすがのようにラウルを見た。

「善処する」

「……わかりました」

アクセルは答えて、さっそく手紙を書き始めた。

「どうするつもりだ？」

カイはラウルに尋ねた。

「小隊を率いて革命軍を討ち、アクセルの知り合いと策士は捕虜とする。そして、知り合いからは家族の状況を聞きだし、策士からは革命軍の軍事状況を聞きだす。」

「小隊では返り討ちにされる可能性があるのではないか？」

「いや、こちらに気づかれないよう、相手は小隊以下、数名程度で来るだろう」

一通り終わると、アクセルはペンを置いた。

「手紙ができました」

アクセルはラウルに手紙を渡した。

『われわれ国王軍は革命軍を殲滅し、フォヤーズ村に侵攻した。

なので、約束どおり三日後、例の場所で落ち合いますよ。』

その場で国王軍の今後の計画を伝えます。

アク

セル』

ラウルは手紙の内容を確認すると、アクセルに返した。

「では、伝達してくれ」

アクセルは伝達鳥の足に手紙を付けると、窓から伝達鳥を飛ばした。

空を舞うことがうれしいのか、伝達鳥はピーーと数回鳴いて大空を駆け回り、暗闇の中へと消えていった。

「さて、そろそろ休ませてもらうよ。今日は格別疲れた」
ラウルはゆっくりと立ち上がった。

「ああ、すまなかった。アクセルは俺の部屋に居てもらうことにする。それと、この件は俺からレンブランに伝えよう」

「ああ、よろしく頼む」

ラウルは返事をする、静かに部屋を後にした。

二日後、兵士たちは束の間の休息を楽しみつつ、最後になるであろう次の戦の準備をしていた。村人たちも抵抗の意思は見えず、中には兵士と笑いあう者たちの姿もあった。

ラウルはクリスの墓へ赴き、手を合わせた。そして、クリスの母親に詫びた。

「あなたが頭を下げるのは、あの子の家族だからですか？ 大勢殺めたうちの一人なのでしょう？ あの子を殺めたことを悔いるなら、あなたが殺めたすべての人たちについても悔いるべきです」

母親の言葉はラウルの心に突き刺さった。

ラウルは何も言えず、うつむいたまま家を出て行った。クリスの妹はその後姿を涙目で睨み付けていた。

日が傾き始めた夕刻、レンブランが昨夜同様に兵士たちの様子を診回中、カイの部屋に伝達鳥が戻ってきた。部屋にいたラウルはアクセルの肩に止まった伝達鳥から手紙を取り、読み上げた。

「陽が沈むまでにカイ一人を連れ、コンサークル高原に來い。適わぬときは家族が死ぬことになるだろう。策士ムース」

アクセルは窓から夕陽を見つめ、有余がないことを悟った。

「すみません。俺、行きます。カイ様は來ないでください」

「ま、待て」

アクセルは静止しようとするカイの手を払いのけて部屋を飛び出した。

カイは慌てて後を追おうとしたがラウルは腕を掴んで止めた。

「待て。敵は大勢で来ているかもしれない。小隊以上の人数で編成し直す」

「全軍で総攻撃を賭ければいいだろう」

ラウルは何度も首を横に振った。

「すぐには無理だ。今の兵士たちのモチベーションと装備ではろくな戦いはできない。それに、おそらくあいつらの狙いはこの村を奪い返し、我々を革命軍の本拠地と挟み撃ちにすることだ。コンサークル高原に出向いている奴らは困かもしれない」

「この村が欲しければくれてやればいい。全軍でやつらを倒して、そのモチベーションで本拠地を落とせば、この戦いを終わらせることだってできるだろう」

カイはラウルの手を振り払い、続けて言った。

「俺には、いや、俺たちには両親も兄弟もない。家族を失うかもしれないアクセルの気持ち、その苦しみを前だって嫌というほどわかっているだろう」

カイの言葉を聞き、ラウルは表情を曇らせた。

「この村が奪還されれば、国王軍の兵士は皆殺されるだろう。この村に住む者も殺されるかもしれない。この村に住むすべての家族、もちろんクリスの家族もだ」

返す言葉が見つからなかったのか、カイは押し黙った。

「……それでも俺はアクセルを追う。ラウルはこの村を守り、この村に危害がないと判断できしだい、兵士たちを連れて救援に来てくれ。それまでは、必ず生き残ってみせる」

カイは決心してラウルの目をまっすぐ見た。そして、防具一式と剣、万一の時のためにとっておいた手榴弾、使い慣れない銃を一つずつ手にすると、部屋を駆け出て馬に乗った。そして、間髪いれずに駆けて行った。

ラウルはカイを止めようと慌てて自分の部屋で防具一式と剣、銃を一丁持ち、部屋を出た。

宿の入り口にはレンブランが戻ってきていた。

「どうしたんだ、ラウル。先ほどカイも慌てた様子で出てきたが」
慌てて出てきたラウルを見てレンブランは尋ねた。ラウルは事のあらましをレンブランに説明した。

「俺はカイを追う。レンブランはこのために編成した小隊に腕の立つ数人を加えてすぐにコンサークル高原へ送ってくれ」
ラウルはとっさに指示を出した。

「俺はどうすればいい？」

「革命軍が攻めてくる可能性がある。兵士たちに戦闘の準備をさせ、革命軍が攻めてくる気配がなければ、念のためさらに小隊を編成して送ってくれ。先日援軍は手配したが期待するな」

ラウルは加えて指示を出すと馬に乗り、カイの後を追った。

レンブランはまず見張り台に行き、見張りの兵士に非常事態鐘令を鳴らすよう指示を出した。

兵士たちが見張り台の下に集まると、レンブランは大まかに事のあらましを説明した。そして、数名の兵士の名を呼び上げた。

「……以上の者はクールガンを筆頭に小隊を組み、直ちに装備を整え、コンサークル高原へと向かえ。着いたらそこにラウルとカイがいる。彼らの指示に従うように。後の者も至急装備を整え、戦闘準備を始めてくれ」

レンブランの指示を聞いた兵士たちは、目を丸くして呆けていた。

そんな中、一人の兵士が口を開いた。

「どういうことか、もっと詳しく説明していただけませんか？」

「今は一刻の時間も惜しい。説明は後です。クールガンたちは革命軍の奇襲に遭う可能性があるから十分周囲に注意を払うように。残る者も革命軍が攻め入る恐れがあるため、直ちに準備をしる。以上」

レンブランは指示を出し終わると、自分も戦闘の準備を整えるため、足早に宿へと戻っていった。兵士たちもようやく状況を把握したのか、慌てて自分たちの寢床へと戻り、支度を行った。

十数分後、支度を終えたレンブランが見張り台へと戻ってきて、クールガンが馬に乗って戻ってきた。

「どうしたクールガン？」

レンブランは焦り口調で尋ねた。

「コンサークル高原へ行く途中に多くの革命軍の姿を確認しました。もはや小隊編成ではコンサークル高原へ行けません」

クールガンは険しい顔をして答えた。次の瞬間、見張り台の上にいる兵士が声を上げた。

「レンブラン様、すごい数の革命軍が攻めてきます」

レンブランは慌てて見張り台の上に登り、あたりを見渡した。すると、出入り口を塞ぐかのように革命軍が押し寄せてきていた。

「我々は、どうすればいいですか？」

クールガンが心配そうに尋ねると、レンブランは自分を落ち着かせるために一呼吸置いた。

「高原に行くのは後だ。小隊には革命軍を討つのに手を尽くすよう伝えてくれ。また、兵士たちにすぐ配置に就くよう伝えてくれ」

レンブランは指示を出すと、自らの手で鐘令を鳴らした。

(ラウル、カイ、少し堪えてくれ。すぐに援軍を向かわすからな)

カイは、コンサークル高原でアクセルに追いついた。日の沈んだ高原は静まり返り、月明かりが優しく二人を照らしていた。

「なぜ、来たのですか？」

アクセルが困惑した表情を浮かべて尋ねた。

「皆が生きて終戦を迎えるためだ。ラウルと小隊が来るまで生き抜くぞ」

カイは覚悟を決めたかのように顔を強張らせた。そして、馬から降りると、手綱を放して馬を逃がした。

しばらく、二人が高原の中央でたたずんだ。すると、遠目に影が見え始めた。

「ご苦労だった、アクセル」

一人の男を筆頭に数名の兵士が姿を現した。

「あいつがお前の知り合いか？」

カイがアクセルに尋ねると、アクセルはうなずいた。

「はい。名はダーチエといます」

アクセルは声を張り上げ、ダーチエに語りかけた。

「家族は無事なのだろうな」

「残念だが、貴様の家族は国王軍側に内通しようとしていたため、
反逆罪で処刑済みだ」

ダーチエの言葉に愕然とし、アクセルは地面に膝を付けた。それを見
ていたカイが声を上げた。

「それはいつの話だ？」

「人質としてすぐだな。まあ、気にすることでもないだろう。二人
とも今から逝くのだから」

カイがダーチエを睨みつけ、剣を抜こうとしたとき、ラウルが馬に
乗って駆けて来た。

「村はどうした？」

カイが尋ねると、ラウルは気難しい顔をした。

「レンブランに指示を出してきた」

ラウルは馬から降りると、アクセルを横目で見た。

「家族は……」

「ああ。だが、敵はあれだけ。策士こそいないようだが、仇を討つ
て村へ戻ろう」

「策士なら来ているさ。周りをよく見る」

ラウルの言葉を聞き、カイはゆっくりと周りを見渡した。すると、
兵士があたりを取り囲んでいることに気づいた。

「やはり、多勢か」

ラウル革命軍の兵士を睨み付けるように周りを見回した。

「無論だ」

ダーチエは得意気な顔をした。

ダーチエの隣に一人の男が姿を現した。

「ムース様、いかがなさいますか？」

ダーチエはムースに尋ねた。

「作戦通りだ」

ムースは冷淡に答えると兵士たちに突撃の指示を出した。革命軍の兵士たちはラウルたちの逃げ場を塞ぐように四方から徐々に範囲を狭めて突撃してきた。

「来るぞ。話も後悔も後にしよう」

カイは剣を抜いた。

「レンブランは必ず来てくれる。それまで生き抜くんだ」

ラウルもまた馬から降りると、剣を抜いた。

「ダーチエは俺が殺ります」

アクセルは立ち上がると、剣を抜き、鬼のような形相でダーチエを睨み付けた。

三人は背を合わせ、四方からやって来る革命軍との戦いに備えた。革命軍がラウルたちのもとへ到達すると、静かな高原が激戦地と化した。地鳴りのような足音や唸り声が轟き、剣が交わると火花が散った。

三人は革命軍の圧力に押し潰されそうになりながらも必死に堪えた。

「この隊形では潰される。もう少し敵数を減らしたら、隙をみて三方向に散るぞ」

ラウルは目の前の敵を斬り払うと、二人に目を配った。

「わかった。死ぬなよ」

カイもまた目の前の敵を斬り払うと険しい顔つきで答えた。

それからしばらく同様の隊形で戦いが続いた。ラウルとアクセルは数箇所を傷を負っていたが、致命傷となるようなものは一つもなかった。恐ろしいことにカイは、無傷で革命軍の兵士を斬り捨てていった。

革命軍の兵士たちは、堪らず後退した。

革命軍の一人の銃士が銃を構え、カイに向けた。

「散るぞ」

ラウルはそれを見つけると、慌てて指示を出した。

三人は革命軍たちを斬り払いながら、僅かな隙間をくぐり抜け、三方向に散らばった。

銃士は自軍の兵士が邪魔で、カイに照準を合わせられずにいた。

ラウルは兵士たちの横を抜けると持ち合わせていた銃を手にとった。そして、革命軍の銃士に照準を合わせ、引き金を引いた。弾は兵士たちの間を縫って、銃士のこめかみを打ち抜いた。

ラウルはすぐさま銃から剣に持ち替え、さらに距離をとるために走っていった。

三人は一定の距離を開け、剣を構えた。

次の瞬間、ラウルは自らの目を疑った。革命軍も三方向に散らばり、三人を追ったが、ほとんどはカイのほうへ向かっており、ラウルとアクセルのほうには僅かな兵士しか向かってきていなかった。

「カイさえ倒せれば、後は残りで畳み掛けられる。兵士を順等に割り振って追えば、中途半端な結末を迎えかねんからな」

ムースは薄ら笑みを浮かべた。

「邪魔だ」

ラウルは怒鳴り声を上げ、革命軍の兵士を斬り払いながら、カイのもとへ駆け出した。しかし、兵士たちの予想以上の抵抗にあい中々進めずにいた。

(やむを得ない。カイ少し待っていてくれ)

ラウルは先に兵士たちを斬り伏せることにした。

アクセルは、兵士たちを斬り払いながらも照準をダーチェに合わせ、走っていった。

「出口を斬り開け」

レンブランは兵士たちに檄を飛ばすと、自らも剣を抜き、村の西側出入り口へと駆けていった。村では既にどの出入り口でも剣が交わり、金属音が響いていた。数では圧倒的に革命軍が優勢であり、村

の入り口を抜けられるのも時間の問題のように思われた。

「援軍は間に合わないか」

レンブランは眉をひそめると、歯を食いしばった。しかし、何やら村の中から声が近づいてきた。

「村に入れるな」

フォヤーズ村の青年たちが農具を手に駆けてきた。

咄嗟に剣を向けたレンブランの横を抜けると、フォヤーズ村の青年たちは革命軍の兵士たちに斬りかかった。

「どうして？」

レンブランが目を丸めている、一人の青年がレンブランのもとへとやって来た。

「長老が国王軍に付くほうが適策だと判断した。それだけだ」

フォヤーズ村の青年たちの支援もあり、一時は革命軍の侵入を許すところであつた入り口での攻防も体制を立て直すことができた。

しかし、それでも尚革命軍側が優勢であつた。

「援軍が来るはずだ。もう少し堪える」

レンブランは今一度兵士たちの士気を高めるべく、声を上げた。そして、再度先陣へ向かった。

国王軍の防戦が続いた。多くの兵士が傷つき、レンブランの前で倒れていった。

（敵の数が多すぎる。何とかしないと、このままでは敗戦も時間の問題だ）

レンブランは歯を噛み鳴らすと、策を練るために現状把握に努めた。

見張り台にいた兵士が慌てた様子で走ってきた。レンブランは一

旦戦線から引いた。

「レンブラン様、援軍が見えました」

「どれ程の人数だ？」

レンブランは祈るように尋ねた。

「おそらく一軍すべてです」

レンブランは思わず笑みを溢し、こぶしを強く握った。

「よし。挟み撃ちにして一気に片をつけるぞ」

レンブランは剣を掲げ、またもや先陣へと向かっていった。

目前の敵に気をとられていた革命軍は、後方から迫り来る敵に気づくことができず、板ばさみ状態となった。

「勝利は目前だ。押し切れ」

革命軍の指揮官が声を張り上げると、革命軍は必死の抵抗をみせた。しかし、戦況は瞬間に逆転した。

「指揮官を狙え。早くこの戦いを終わらせるんだ」

レンブランはラウルたちのことが気にかかり、焦りを浮かべていた。

援軍が到着しても予想以上に苦戦を強いられ、一刻ほど経過した。指揮官は剣を向けられると、潔く降伏した。

援軍の策士は馬から降りると、レンブランに歩み寄った。

「班のサジェスです。ラウル殿の伝達を受け、支援に参りました。ラウル殿はどちらに？」

サジェスはレンブランに尋ねた。

「おそらくラウルは今、コンサークル高原で交戦中です。直ちにそちらへ向かって欲しい。クールガンはいるか？」

レンブランは辺りを見回した。すると、人ごみを掻き分けながらクールガンが顔を覗かせた。

「はい。ここです」

先陣から戻ってきたばかりのクールガンは疲れた顔をして答えた。

「俺は彼らと高原へ向かう。見張りを厳重に行い、兵士たちにはいつでも戦を行えるようにモチベーションを上げておくよう伝えてくれ」

「まだ、攻めてくる可能性があるということでしょうか？」
クールガンは表情を曇らせた。

「革命軍は今回の策にかなりの兵士を費やしたはずだ。これ以上攻め込んでくる可能性は低い。しかし、これを機に我々は一気に革命軍の本拠地シデタル攻め込むかもしれない」

レンブランは険しい表情で説明した。そして、近くにいたフォアヤー

ズ村の青年を呼んだ。

「おかげで助かった。皆にありがとうと伝えておいてくれ」
レンブランは笑顔で言うと、早速馬に乗った。

「班は直ちにコンサークル高原へ向かう。戦闘準備をしておくように」

サジェスは兵士たちに指示を出すと、馬に乗りレンブランと共に駆けていった。

カイは左腕を斬りつけられ、防戦一方になっていた。一方、ラウルはようやく革命軍の兵士を斬り倒した。すると、すぐさまカイのもとへと駆けていった。

アクセルもまた、何とか革命軍の兵士を斬り倒した。そして、ラウルがカイのもとへ向かったことを確認するとダーチエのもとへと駆けていった。

「始末してきます」

ダーチエはムースに告げると、勢いよく駆け出した。そして、間もなく二人の剣は交わることとなった。

先刻、革命軍の兵士に負わされた手傷を攻められ、アクセルは防戦を余儀なくされた。

「安心しな。家族同様、痛みを感じる前に殺してやる」

ダーチエは力の押し合いになっていた剣を引き、アクセルの体勢を崩した。すると、ダーチエはアクセルの咽喉元を目掛けて剣を振り抜いた。

二人の間に突風が吹き抜けた。

ダーチエの剣速は鈍り、アクセルは剣を受け止めるとダーチエの剣を後方へ弾き飛ばした。

「躊躇っている訳ではあるまいな」

アクセルが尋ねると、ダーチエは一瞬表情を曇らせた。

「お前は敵だ。躊躇う必要があるか？」

ダーチエはすぐさま殴りかかったが、アクセルは剣の柄でダーチエ

の胸を突いた。

「躊躇っているのか？」

ダーチエはその場に倒れこみながら、鼻で笑った。

「……安心ろ。痛みは感じさせない」

アクセルは剣を振りかざした。ダーチエは覚悟を決めたのか、目をつむった。

アクセルが剣を振り下ろそうとした時、ムースが銃を構え、ラウルを狙い撃とうとしている様子が窺えた。

「ラウル」

アクセルの声と同時に、一発の銃声が鳴り響いた。

ダーチエが目を開けると、目の前にアクセルの姿はなかった。

ムースが構えた銃からは煙が上がっていた。

ラウルもまた銃声を耳にし、立ち止まった。そして、銃声のしたほうへと振り向くと、そこには胸を押さえ、地面に膝をつくアクセルの姿があった。

「アクセル」

ラウルが大声を上げたその時、ムースが銃に弾を込めなおす様子が見えた。

ラウルはすぐさま銃を構えた。ムースもほぼ同時に銃を構えた。そして、二発の銃声が響き渡った。ムースの銃弾はラウルの左肩をかすめた。一方、ラウルの銃弾はムースの額を打ち抜いていた。

ダーチエはアクセルに弾かれた剣を拾うと、腹を押さえながらアクセルのもとへ向かった。ラウルは慌てて最後の銃弾を銃に込めると、銃をダーチエに向けた。

アクセルの右手が動いた。ラウルはアクセルの想いを汲んで引き金を引くことを躊躇った。

「……すぐ楽にしてやる」

ダーチエはアクセルのもとへゆっくりと歩み寄ると、ダーチエは剣を振り上げた。しかし、一瞬の躊躇いを見せた。その瞬間、剣を持つアクセルの右手がダーチエの胸元へ伸びた。

「もう、終わりにしよう」

ダーチエの胸からは血が流れ落ちた。

アクセルが剣を静かに抜くと、ダーチエも膝をつきアクセルへもたれ掛かった。

「俺がしたこと、許されるとは思っていない。……仕方がなかったんだ。お前の家族を捕らえないと俺の家族が……」

ダーチエは涙を流し、言葉を詰まらせた。

「すまなかつた。辛い思いをさせたな」

アクセルは哀れむようにダーチエに話しかけた。アクセルとダーチエは互いにもたれかかりながら、息を引き取った。

カイは未だ防戦を強いられていた。そして、ついに四方から同時に突きつけられた剣の一つがカイの左腹部を貫いた。カイは目を見開くと、口から血が流れ落ちた。

ラウルは慌てて銃を向け、カイに剣を突き刺した兵士を撃ち抜こうとした。

「小ざかしい」

その兵士を含めたカイの周辺を囲む兵士たちはカイによって瞬く間に斬り伏せられた。次の瞬間、斬り伏せられた兵士たちの後方から、またしても四方から同時に剣が突き刺された。今度は二本の剣がカイの胸を貫いた。

カイは何とか踏み止まると、その兵士たちを斬り伏せた。

「化け物か、こいつ」

兵士たちがたじろぐと、カイは態勢を立て直し、ラウルのほうに顔を向けた。そして、自らの腰に携えている手榴弾へと目をやった。

ラウルはそれが何を意味しているか瞬時に理解した。

「かかれ」

接近戦を指示していると思われる兵士のかげ声でもたしても四方から剣が伸びた。その攻撃で両手両足を貫かれたカイは剣を落とした。これを機に止めをさそう歩み寄る兵士たちをカイは鋭い眼光で睨みつけた。

兵士たちは思わず足を竦ませた。

カイは今一度ラウルのほうへ顔を向けた。ラウルは戸惑い、首を横に振った。すると、カイは腕に付けられた十字架の焼印をラウルに見えるように掲げた。

『俺たちはいよいよ明日、軍に入隊することになる。万一、戦場で俺が敵の手に落ちそうになった時には、その手で俺を殺してくれ、ラウル』

『……わかった。でも、逆の立場になった時にも同様に俺を殺してくれよ、カイ』

夕陽が照りつける、あの丘の上の約束が走馬灯のようにラウルの頭を駆け巡った。

「け、剣を投げつける」

兵士の指示で周囲の兵士たちは剣を持ち替えた。カイは両足に刺さった剣を抜き捨てると、足を引きずりながら兵士たちのほうへ歩み寄った。

「こいつ、まだ動くのか？」

兵士たちは恐怖に身を震わせた。カイは首に掛けていた、旅立ちの日にシスターからもらったロケットを右手に巻きつけると、ラウルのほうを向き、優しく微笑んだ。

まるで、時が止まったかのように、二人の間を静かで穏やかな空間が包んだ。

「わかった。わかったよ、カイ」

覚悟を決めたのか、ラウルもまた首に掛けていたロケットを外すと、右手に巻きつけた。そして、カイの腰に携えてある手榴弾に照準を合わせた。

「ありがとう」

カイは小声でそう言うと、微笑を浮かべたまま静かに目を閉じた。

「すまない」

二人はほぼ同時に言うと、ひと筋の涙を流した。そして、ラウルはゆっくりと引き金を引いた。

銃弾は兵士たちの間を縫ってカイのもとへ到達した。打ち抜かれた手榴弾は爆発を引き起こした。

「な、何が……」

後方にいた革命軍の兵士たちは一命を取り留めたが、状況を把握する前に歩み寄るラウルに止めを刺された。

「降伏する。だから、助けてくれ」

逃げ惑う兵士に対しても執拗に追いかけて、必ずその息の根を止めた。そして、ラウルは革命軍の兵士を一人残らず殺して回った。

ラウルは何かを踏んだことに気がつくのと足元を見た。そこには鎖の部分が断ち切れ、少し形がひしゃげたロケットがあった。

ラウルは膝をつき、大事にそれを拾い上げた。そして、堪えようのない涙を流した。

遠くから馬が駆けてくる音が聞こえた。

終結

レンブランたちがコンサークル高原に到着すると、そこには膝をついて、呆然としているラウルの姿があった。

「生存者の確認を頼みます」

レンブランはサジェスに指示を出すと、ラウルのもとへと駆けていった。

「よし、生存者の確認だ。革命軍の兵士の生き残りがいたら生きてまま捕らえる」

サジェスは兵士たちに指示を出すと、レンブランに続いてラウルのもとへと駆けていった。

二人がラウルのもとに到着すると、ラウルはゆっくりと立ち上がった。

「遅れてすまない。ラウルの予想通りフォヤーズ村で奇襲にあった。こちらの方が来てくれなかったら、間違えなくやられていただろう」レンブランは手のひらでサジェスを指した。

「サジェス殿、援軍感謝する」

ラウルは穏やかな表情で礼を述べた。しかし、その言葉には覇気が感じられなかった。

「……遅かったようですね」

ラウルは落ち着き払った顔をして首を横に振った。

「サジェス殿は村へ戻り、全兵を連れて直接革命軍の本拠地シタデルへ、レンブランは今いる兵士を呼び集めて俺と一緒にシタデルに攻め込む」

ラウルは現状にはまったく触れず、二人に指示を出した。

「随分急だな。それより、現状を報告したい」

「報告は後にしてくれ」

「……ならば、せめてこの状況の説明をしてくれないか？ カイはどうした？ アクセルは？ 二人はどこにいる？」

レンブランが尋ねると、ラウルは覇気のない顔を向けた。

「二人とも死んだ」

ラウルはアクセルの倒れている場所と爆発跡を指差した。

「それだけか？ そんな説明で納得できるか？」

ラウルの説明に苛立ったレンブランはラウル胸ぐらを掴み上げた。

しかし、ラウルはあくまで冷静にレンブランの手を振り払うと、サジェスに指示を出した。

「サジェス殿、悪いが先に兵士を集めてくれないか？」

「……わかりました」

サジェスは何も問うことなく、すぐさま馬に乗り、駆けていった。

「どういうことだ？」

レンブランは再度ラウルの胸ぐらを掴み、怒鳴りつけた。すると、先ほどまでの冷静さを一変させ、ラウルは歯を噛み鳴らした。

「アクセルは俺をかばって撃たれた。カイは俺が殺した。カイの持っている手榴弾を撃ち抜いて被爆させた。……これが聞いて満足か？ お前に俺の気持ちがわかるか？」

ラウルは怒鳴るように言った。

「……」

レンブランは言葉を失った。

レンブランはようやく言葉をしぼり出した

「親友を跡形も失くしてまで生き残りたいのか？」

レンブランが口にした言葉はラウルの逆鱗に触れた。

「お前に何がわかる？」

ラウルはレンブランの胸ぐらを掴むと、その場に押し倒し、続けた。

「数年前にあった程度のお前に、共に育ってきた俺とカイの何がわかる？ この腕の焼印を見る。カイとの約束の証だ。苦しみと悲しみ、覚悟を背負う誓いの証だ」

ラウルがどれ程の覚悟で引き金を引いたのか、そのラウルの目からようやく察することができた。どれ程の苦しみと悲しみを背負ったかも理解できた。

レンブランはもはや何も言い返すことができなかつた。ラウルもまた、自分の行為の重さを再認識し、言葉を失くした。

サジエスは兵士たちを呼び集めると、ラウルのもとへと駆けていった。そして、ラウルがレンブランを押し倒しているのを見つけると、二人を引き離し、レンブランを起こした。

「敵意を向ける相手が違うのではないですか？ 二人が冷静さを失うようなら、ここからは私が指揮を執らせていただきます」

サジエスの発言で、落ち着きを取り戻したラウルは、深く深呼吸をした。

「すまない。もう大丈夫だ」

ラウルは体についた土を払うと、兵士たちのほうへ振り向いた。

「革命軍はフォヤーズ村とこちらへの出兵でかなり手薄になっていると思われる。この機会を生かし、革命軍の本拠地シタデルへ総攻撃をかける。これが最後の戦だと考えてもらって良いだろう」

ラウルの顔を見て、任せても大丈夫であると判断したサジエスはさっそく馬に乗った。

「では、至急村に戻り、兵士たちを連れてまいります」

サジエスは馬の腹を蹴ると駆け出していった。

「策は？ シタデルの門を開かせないことには総攻撃は叶わないぞ」レンブランが尋ねると、ラウルは自分が殺めた革命軍の兵士を指差した。

「そこに革命軍の防具がある。数人があれを着て本拠地内に入り、門を確保する。後は突撃するのみだ。相手はこの戦いでかなりの戦力を失ったはず。今なら正面から戦える」

「わかった。状況変化に対応できるよう、俺は門の確保に回る。それと、さっきは……」

レンブランが言い切る前にラウルは軽く手を挙げ、発言を遮った。

「それでは、門の確保はお前が指揮してくれ」

ラウルはレンブランの肩を叩くと、優しく微笑んだ。

「皆、突撃準備をしてくれ。その者たちは申し訳ないが革命軍の防具に着替えてくれ」

レンブランは十数名の兵士たちに指示を出した。

高原は静けさを取り戻し、優しい月明かりの下、静かに準備がされていった。

「先に行く」

「気をつける。手薄になっているとはいえ、敵の本拠地だからな」
兵士たちが着替え終わると、ラウルと会話を交わし、レンブランは兵士たちを率いて馬を走らせた。

レンブランたちの姿が見えなくなると、ラウルは集めた兵士のほうへ振り返った。

「我々も門が開き次第突撃できるように周辺まで行くぞ。馬は足音で気づかれる可能性があるため、走ってゆく。途中からは歩くことになるが、ハンドシグナルで指示を出す。注意を怠るな。万一、途中で革命軍に出会ったら、騒がれる前に殺せ」

ラウルは指示を出すと、兵士たちの準備が整うのを待った。

「行くぞ」

兵士たちの準備が整うと、号令を出し駆けていった。

「兵士たちが戻ってきました」

革命軍の本拠地シタデルの門が開かれ、兵士たちは中へと歩いていった。

「フォヤーズ村は失敗したと聞くから、あれは高原のほうの兵士たちだな」

「おそらく。しかし、百名の兵士を派遣して生き残ったのが十名程度か。ムース様やダーチエの姿もなし」

ボロポロの防具を着た兵士たちは温かく迎え入れられた。そして、一人の男が兵士たちに歩み寄った。

「カイは討てたか？」

男が尋ねると、一人の兵士が前に出た。

「はい」

兵士はうつむきながら答えると、男は肩を叩いた。

「よくやった。ムースの死は痛手だが、あの化け物さえいなければ
フォヤーズ村の奪還も何とかなるだろう」

男は高らかに笑いながら去っていった。

「何とかなるなんて、いい加減な考えで国王軍が撃てるか」

レンブランは兜を取ると、今すぐにでも斬りかかりたい衝動を必死
に抑えながら、男の背中をいつまでも睨み付けた。

「ラウルたちもそこまで来ているはずだ。今より門の確保に向かう」
男の姿が見えなくなると、レンブランは小声で兵士たちに指示を出
した。

ラウルたちは、門の見える茂みに身を潜めていた。

「遅いですね。何かあったのでしょうか？」

ラウルの傍らにいる兵士がラウルの顔を窺いながら尋ねた。しかし、
ラウルはただ黙って門を睨み付けていた。

「ラウル様？」

「黙ってみている」

ラウルは怒り口調で兵士に言い放った。兵士は忽ち恐縮してしまい、
脅えた表情で門を見つめた。

それから一刻が経ち、兵士の集中力も散漫になり始める頃、急に
ラウルが立ち上がった。

「動くぞ。皆、準備しろ」

ラウルが口を開くと、兵士たちは動揺しながらも立ち上がった。

兵士たちが気を引き締めると、同時に門が開いた。

「行くぞ」

ラウルは剣を抜くと、先陣を切って走っていった。

「あ、後に続け」

ラウルの傍らにいた兵士が声を上げると、兵士たちは一斉に剣を抜
いた。

「オー」

兵士たちは雄叫びのような声を上げると、ラウルの後に続いた。

「敵襲だ。鐘令を鳴らせ」

門の前に立っていた見張りの兵士が声を上げたが、レンブランたちによって見張り台は占拠されていた。

ラウルたちは門の前にいる兵士を斬り伏せると門を潜った。そして、革命軍との最後の戦が始まった。各々の想いが剣に込められ、時にそれは火花と散った。

人数では圧倒的に国王軍有利であったが、階層建てになっている砦の上からの銃撃で砦の中に入ることはできずにいた。

「ラウル」

レンブランが前方で声を上げると、ラウルは敵を斬り払いながらレンブランのもとへと向かった。

「レンブラン、無事だったか？」

「ああ。それより、どうする？ このままではいずれ形勢は逆転するぞ」

二人が話をしていると、ラウルの頬を銃弾が掠めた。二人は一旦瓦礫の中に身を潜めた。

「奴ら、貴重な火薬をここぞとばかりに使ってきている」

「確かにあの銃撃は厄介だ。……馬を入り口に突っ込ませよう」

ラウルが銃声で響き渡る中、大声でレンブランに言うのと辺りを見渡し、馬を探した。しかし、敵と交戦しながらの作業は思う以上に捗らず、戦況は次第に悪化していった。

刻々と時間が過ぎてゆき、無理に砦へ侵入しようとした兵士の屍が二人の目の前に増え続けていった。

「一旦退避しろ」

ラウルが必死に声を上げるが、うなり声や剣が交わる音、銃声に阻まれ、兵士たちの耳には届かなかった。そして、一人、また一人と若い命が消えていった。

「くそ」

ラウルが思わずと飛び出そうとすると、

「止せ、ラウル」

レンブランは必死にラウルを地面へ抑えつけた。

「放せ、レンブラン。このままでは皆が死んでしまう」

「それはお前が飛び込んで同じことだ。それより打開策を練るべきだろう」

ラウルは何一つ言い返せず、唇を噛み締めた。

レンブランがラウルの肩を起こすと同時に、爆弾が破裂するような大きな衝撃音が鳴り響いた。

「何の音だ」

ラウルが起き上がり、辺りを見回すと、馬が砦の入り口を突き破っていた。

「失礼。遅くなってしまいました」

サジェスは馬に乗ってラウルたちの横に着けた。

「ありがとう。助かったよ」

ラウルは安堵の表情を浮かべると、レンブランに手を差し伸ばし、引き起こした。

「ああ。これでようやく敵を討てる」

レンブランはゆっくりと立ち上がると、腰周りの土を払った。そして、三人は開いた砦の入り口を睨み付けた。

「さあ、ケリを付けにいかうか」

ラウルは静かに言くと、砦に向かって駆け出した。

「皆、ラウルに続け」

レンブランは慌てて兵士たちに指示を出すと、ラウルの後について砦の中へと入っていった。

ラウル先導のもと、兵士たちは一斉に砦内へと攻め込んだ。

「上へは行かせるな。狙撃隊、撃て」

「ラウル様を守れ」

革命軍の一斉射撃にも怯まず、多くの兵士たちがラウルたちを庇い

倒れていった。

「医療班、負傷者の手当てを頼む。残りの者は俺の後に続け」

ラウルは声を上げると、目前の敵を斬り払いながら上を目指した。

最上階に到着した。革命軍の長ジェルドがいると思われる部屋の前にはクリスと同じ黒の鎧を纏い、大剣を携えた兵士が二人立っていた。

「ラウル殿とレンブラン殿は中へ。ここは我々が引き受けます」

サジェスが後方で耳打ちするかのようになんか言っていると、ラウルは兵士二人をじつと観察した。

「こいつら、かなり強いぞ」

ラウルは肩越しに小声で答えた。

「わかっています。しかし、我々の目的はジェルドを倒し、この戦いを終わらせること。そして、それはあなたがすべきことです。彼もそれを望んでいるでしょう」

サジェスの言葉を聞くと、ラウルはロケットを強く握り締めた。

「……わかった。ここはお任せしよう」

ラウルは剣を納めると、一歩下がり、サジェスに指揮を任せました。

サジェスは剣を掲げると、突撃の合図を出そうと口を開いた。しかし、その瞬間相手の兵士が声を上げた。

「中央にいる男、お前がラウルだな。ジェルド様がお前だけは通せとおっしゃった。入るがいい」

兵士たちは横に動くと、ジェルドの部屋への道を空けてみせた。

「罠でしょうか」

「……かも知れない」

ラウルはサジェスの肩に手を置くと、押しのけるようにして前へと出て行った。

「しかし、ここは行かせてもらおう。終幕を心待ちにしている者のために」

落ちていた口調とは裏腹に鬼のような形相のラウルを見て、一同は言葉を失った。

「わかった。我々もすぐに駆けつける」

レンブランはラウルの背中をゆっくりと押し出すと、顔を向けるラウルに強い眼で小さくうなずいた。

(カイ、もうすぐ終わる。終わらせてみせる)

ラウルもまた強い眼でうなずき皆に伝えると、ゆっくりと歩き始めた。そして、敵の兵士に目もくれず、部屋の扉を開けた。

扉が閉まると同時に、部屋の外では地鳴りのような足音が響き渡った。しかし、ラウルは振り返ることなく、広場のような大きな部屋を中央へと歩いていった。

ラウルが部屋の中央まで来ると、正面の椅子に腰掛け、あごひげを生やした、顔には傷を幾つも刻んだ男がゆっくりと立ち上がった。

「汝がラウルか？ こんな若造に我らの想いが崩されようとはな」

「何が我らの想いだ、ジェルド。お前が戦を始めたことで、どれだけの人が命を落としたと思っている？ どれだけの人が奪わなくてもいい命を奪ってしまったと思う？ どれだけの人が……」

ラウルの脳裏には自分が殺めた人やそのために不幸を背負った人など多くの人の苦難の表情が浮かんだ。

「若造が知った口を利くな！」

ジェルドはラウルのもとに歩み寄りながら、言葉を続けた。

「国王を殺したのは我の指示ではない。あれは国王軍、元老の仕業よ」

「馬鹿をいうな」

その言葉を聞くなり、ラウルは声を上げた。

「聞け。我と国王ジークは元より親友だった。革命軍の創成もジークの案だ」

ジェルドはラウルを押さえ付けるように強い口調で言い放った。

「何を言っているんだ？」

ラウルは眉間にしわを寄せた。

「ジークが国王になったとき、他にも複数の国王候補がいた。その者たちが反ジーク派を唱え、元老を設立させた。奴らは汚いやり方

で支持者を募り、裏では悪事を働き、権力を拡大していった。そして、ジーク暗殺が幾度となく試みられた」

ジェルドはラウルの目の前まで歩み寄ると、ラウルの辺りを回り始めた。

「我はジークの側近となり、身の護衛を願い出た。しかし、ジークは元老側に一人の同士がいることを理由に、未熟であった我を危険から遠ざけた。そして、奴は一つだけ願いを口にした」

ジェルドはラウルの背に周ると、横目で窓の外に掛かっている革命軍の旗を見つめた。

「奴の願いは、革命軍を創成し、自分にもしものことがあつた際、元老の悪制を壊すこと。……今がその時だったが、それをお前たち壊してくれた」

ジェルドは悔しそうに静かに眼を閉じた。

ラウルはヴァーミアン砦で最後まで抵抗していた男の言葉を思い出した。

『私は知っている。国王暗殺は革命軍の仕業ではなく、げん……』
ラウルは何度も首を横に振った。

「馬鹿な。そんな話が信じられるか」

ジェルドの方を向いたラウルは声を震わせていた。

「……心当たりがあるようだな。ならば他言は無用。信じるかどうかはお前の心次第だが、これが真実。……さて、決着をつけよう」
ジェルドもまたラウルの方へと振り返ると、二人は向き合った。そして、ジェルドは腰に携えた剣をゆっくりと引き抜いた。

「その話をするのは私が初めてか？」

「ああ」

「革命軍の仲間には話しただろうか？」

「いちいち下の者に話す必要があると思うか？」

ラウルはあからさまに動揺していた。この話が真実ならば、革命軍は国のために蜂起していたことになり、ラウルは自分と志を同じとする者たちを殺めていたこととなる。

（で、でつちあげに決まっている。こいつを殺せばすべてが終わるんだ。何を迷う？）

革命軍の壊滅は確実となった今、自分一人を動揺させてもジェルドの拘束は免れない。その上、元老のせいにするのはジェルドにとって意味を成さない。ラウルは躊躇いを浮かべ、剣を抜かずにいた。すると、ジェルドはラウルを睨み付けた。

「さあ、剣を抜け」

ラウルはやむを得なし剣を抜いた。しかし、いつまでも構えられずにいた。

「大人しく拘束されてくれないか？ 事実を調査する。それまでは如何なる手を使ってもお前を処刑させるようなことはさせない」
一歩後退したラウルを見て、ジェルドは深いため息をついた。

「こんな生温い小僧に我らの想いを砕かれたと考えると虫唾が走る。言い飽きたが、我の話したことは真実。しかし、貴様の言うとおり戦争を引き起こし、多勢を殺めたのも真実。」

ジェルドは険しい表情で言い放つと、けん制するように剣を振り落した。ラウルは腰に携えていた剣を抜き、ジェルドの剣を弾いた。

「しかし……」

「もう、しゃべってくれな。どの道、革命軍は今日墮ちる。真実が知りたいのならば、この戦いを終わらせてから知ればよい。そのためには我を討つ必要はあるがな」

ジェルドは大きく剣を振りかざすと、今度はラウルを目掛けて力一杯振り下ろした。ラウルは剣で受けたが、ジェルドのあまりの力に後方へ弾き飛ばされた。

「クッ……」

迷いのあるラウルは膝をつき立ち上がれずにいた。その様子を見ていたジェルドはあからさまに苛立ちを浮かべた。

ジェルドは間合いを詰めると、ラウルの顔を蹴り上げた。

「もうよい、大人しく逝ね。今一度戦争を起こし、今度こそ元老たちを殺めてみせる」

「また多くの犠牲者を出すつもりか？　また、多くの者に仲間を殺させ合うのか？」

ラウルは口から流れた血を拭った。

「……仕方のないことだ」

「それはジーク様の望みか？　ジーク様の望みは民の平和ではないのか？」

ラウルは必死に訴えかけた。

「小僧、綺麗事はたくさんだ。お主は民の平和を求め、何人の民を殺めた？　何人の仲間を犠牲にした？　仕方ないと自分に言い聞かせてきたのではないか？」

ジェルドはゆっくりとラウルに歩み寄ると、額に剣を突きつけた。

何も考えられなくなったラウルはゆっくりと目を閉じると死を覚悟した。

部屋の扉が開くと、レンブランを始めとする国王軍の兵士たちが部屋へとなだれ込んできた。レンブランは左肩から血を流し、残りの者も体中に傷を負っていた。

「ラウル、何をやっている」

レンブランはジェルドの前にひざまづき、目を伏せるラウルに向かって怒鳴り声を上げた。

「この者は真実を知り、心が折れた。後は死に逝くだけだ」

ジェルドが語ると、兵士たちは一斉に武器を構えた。

「どうやら、私の命運も尽きたようだな。これからは元老による独裁が始まるだろう。己の私欲を肥やすためにこれまで以上に民が苦しむ時代が訪れる。ジークの望みも叶わず、多くの民は無駄死にだ」

ラウルはカイの顔を思い浮かべた。そして、アクセルやクリス、その家族、犠牲になったさまざまな者たちの顔が思い浮かんで消えていった。

（もう引き返せないのか？　……皆を無駄死にさせてはならない）
ラウルはゆっくりと目を開けるとジェルドの剣を払い、立ち上がった。

「ジーク様の想い、あなたの想い、皆の想いすべてを俺が引き受ける」

ラウルはジェルドの目を真っ直ぐ見ながら言うと、剣を構えた。

「……この戦争は間違えたのかもしれない。別の手段を考えるべきだったのかもしれない」

ジェルドはジークを想った。

「二度と弱音を吐くな。主が悔いても死んだものは蘇らん。己の正義を貫け。そして、民の平和を……」

「ああ」

ジェルドはラウルの力強い返事を聞くと、剣を床に突き刺し、両手を広げた。

ラウルは構えた剣をジェルドの胸に突き刺した。ジェルドは抵抗することなく、死を受け入れた。

「元老ウォルスを疑え。奴は最後までジークと国王を争った男だ。

元老長ジェスを信じろ。彼はジークの親友だった男だ。……息子はとんだ愚か者だがな」

ラウルは目に涙を溜めながら、ジェルドの言葉を聞いた。

「生温い男だ。しかし、これからの王国には必要なかもしれない」
ジェルドは笑みを浮かべた。

「皆の想いを果たし、平和を取り戻したらこの地に報告へくる。だから、今は静かに眠ってくれ」

「ああ、酒を忘れるな。ジークと楽しみにして待っている」

息を引き取り、倒れこむジェルドをラウルは優しく抱きかかえ、その場へと寝かせた。

外の争いも止み、途端に静けさが漂った。

「戦は終わった。この砦を焼き払おう」

ラウルは椅子の両脇に立ててある革命軍の旗を手に取ると、一つをジェルドの亡き骸に掛け、もう一つは自分の肩に掛けた。

「奴の首を持っていかないのですか？」

サジェスは納得のいかない表情でラウルの顔を覗き込んだ。

「ああ。彼には少し離れたところで、国の行く末を見守っ
ていらいたい」
ラウルの顔があまりに悲しそうであったので、サジェスはそれ以上
追求することはなかった。

コンサークル高原に戻るとラウルはカイの亡き骸をその場に弔つ
た。そして、燃え崩れるシタデルを悲哀の表情で見つめた。

「戦は終わったよ、カイ。……とりあえず、終わった」
ラウルはカイの剣をその場に突き刺した。そして、爆発でひしゃげ
たカイのロケットを新しい鎖に繋げて首からぶら下げた。

「ラウル、敵兵を含む犠牲者すべての弔いが終わった」
レンブランは後方からゆっくりとラウルに近づくと優しく声を掛け
た。

「カイ、もう行くよ。まだやらなくてはいけないことがあるんだ」
ラウルは革命軍の旗を強く握り締めた。

「我々も手伝いますよ」

サジェスの声に耳を傾けると、ラウルは後ろを振り向いた。すると、
ラウルの後ろには兵士たちが整列していた。

「ああ、よろしく頼む。皆、忘れないで欲しい。我々の勝利は多く
の犠牲と哀しみを生み出した。我々はその者たちのためにも多くの
平和を作り出す義務があることを。我々の戦いはまだ終わっていな
い。皆で力を合わせて平和を築き上げよう」

話を聞いた兵士たちは手を高々と挙げた。

ラウルはひどく疲れた顔をしていたが、精一杯笑顔を作った。

兵士たちを引き連れてラウルはその場を立ち去った。

「また、来るよ」

（ああ、待っている）

カイの声が聞こえた気がして、ラウルは振り返った。

赤く染まる空を後方にして、ラウルたちはゆっくりと歩き始めた。

対峙

心を削る話をして疲れ果てたのか、ラウルはユウのひざの上で眠ってしまつた。ユウは寝息をつくラウルを哀しげな瞳で見つめると、優しく頭をなでた。

（聞くんじゃないかった。この人は本当に平和を願っている。そして、この人にはそれを成す力がある。……お兄ちゃん、私どうすればいい？）

ユウはその瞳に涙を浮かべた。

月日は流れ、半年が経過した。ラウルが国王の座を断固拒否しているため、ついに元老のウォルスがその座に名乗りを挙げた。しかし、元老の長であるジェスは、ラウルを国王に推薦し続け、数名の元老も同意しているため新しい国王は未だ決まらず、元老同士の対立が起こり始めていた。

「これまでの調査からして、疑わしき元老はジェルドの言うようにジェス元老長の息子アーヴァンと元老一の古株ウォルスの二名。ウォルスはジーク様と国王候補として最後まで争ったが、不正が見つかり敗退した者だ」

ラウルの部屋でレンブランは資料をラウルに手渡すと、ゆったりとソファアーに腰を掛けた。

ラウルは資料の隅々まで目を通した。

「これではまだ不十分だな。裏付けを固めてくれ」

「ああ。現在元老たちは新国王の件で意見が分かれ始めている。ウォルスたちも慌しく動き始めているから、直にボ口を出してくれるだろう」

話の頃合いを見て、ユウが紅茶を運んできた。すると、途端にラウルがそわそわし始めた。

「あ、あのな、レンブラン」

「何だよ？ 気持ちの悪い」

レンブランはユウから紅茶を受け取ると、若干眉間にしわを寄せながらラウルの顔を覗き込んだ。

「あの、だな」

ラウルが落ち着かなくしているのを見て、ユウはクスクス笑いながらラウルの横に腰掛けた。そして、ラウルの手の上に手を置いた。

「俺たち、結婚しようと思うんだ」

突然のことにレンブランは目を丸くした。しかし、ラウルの横で穏やかな表情を浮かべるユウを見るなり、安心したようにレンブランもまた穏やかな表情になった。

「いいんじゃないか？ ユウ、ラウルを支えてあげてくれ」

レンブランは手を自分の膝に置いて頭を下げた。すると、ユウは慌ててレンブランの肩を起こした。

「はい」

ユウは満面の笑みで答えるとラウルに微笑みかけた。ラウルは照れくさそうに鼻を掻いた。

「まあ、そういうことだ。式の日程とかは追って話すよ」

「ああ。じゃあ、今日はこの辺で帰るとするよ」

レンブランが立ち上がると、ラウルとユウは扉まで見送った。

「とりあえずラウルは結婚のことだけを考えておけばいい。例の件は俺が進めておこう」

レンブランは首をひねり、後方に目をやるとラウルに小声で話しかけた。

「ああ、頼りにしている。だが、これは俺が託された仕事だ」

ラウルは顔を締まらせて答えた。

「わかった。何かあったらすぐに知らせる」

レンブランはうなずくと、部屋を出て行った。

部屋の扉が閉まると、ユウは後ろからラウルに抱きついた。

「約束、守ってくれるのですか？」

ラウルは一瞬曇った表情を浮かべた。

「……ああ。幸せにするよ」

ラウルは振り返ると、ユウを優しく抱きしめ、口づけを交わした。

ラウルがレンブランに結婚することを告げて三日が経った。

朝方、部屋の扉を叩く音がすると、ラウルは渋々扉を開けた。

「おはようございます」

「ご苦労様です。しかし、何度来て頂いても国王の座に就くつもりはありません」

ラウルは用件を聞かず、日課のように国王の座に就くつもりはないことを元老の使者に伝えた。

「ラウルはまったく王の座に就く気がないようですね。いかがしましよう？　いつまでも国王不在では周辺諸国はもちろん、植民地とされている地の者たちに舐められますよ」

週に一度の集会で元老の一人から意見が出た。ウォルスは元老たちの顔を見回しながら、強かに笑みをこぼした。

「やはり、元老の中から国王を選ぶべきではないでしょうか？　それならば私は先代と肩を並べたウォルス殿を推薦したいと思います」
図ったようにアーヴァンが続けて口を開いた。

「うむ、そうだな」

「ウォルス殿しかいないだろう」

何人かの元老もまた続けた。

話し合いの結果、次期国王がウォルスに傾きかけたとき、若手の元老ユリウスが手を挙げた。

「いや、私はジェス殿を推薦したい。元老の長である彼が国王になるべきだ」

ウォルスは眉間にしわを寄せ、ユリウスを睨みつけた。

「私は国王の座に就くつもりはありません。国王の座は、戦争を経て今を築き上げたラウル殿が一番ふさわしいと思います」

ジェスはウォルスの注意を自分に向けるため、慌てて発言をした。

「しかし、ラウル殿は何度説得しても国王になる気はないという」

ウォルスが困り果てた表情で言うと、ジェスはウォルスの目を真っ直ぐ見た。

「今一度機会をいただけませんか？」

ジェスの強張った顔を見ると、元老たちは渋々うなずいた。

「では、次の説得でラウル殿が首を立てに振らなかつた場合、ウォルス殿とジェス殿とで投票を行うことにしましょう」

ユリウスが提案すると、元老たちは大きくうなずいた。

ジェスは集会が終わると、足早に部屋を出た。ユリウスもまたすぐさまジェスの後を追った。

「待ってください。私にも何か手伝わせていただけませんか？」

ユリウスの声を聞いてジェスは足を止めた。

「私を支持するのは止めなさい。ウォルスは自分がこの国を治めるためならば我々をも殺すだろう」

ジェスは帰還したラウルからジェルドの話聞き、ラウルと一緒にウォルスの悪行について調査していた。

「どういうことですか？」

「君は何も知る必要はない。ただ、万が一私とラウル殿の身に何かあつた場合は、君が国の長になれるよう努力してくれ」

ジェスは一度も振り返ることなく話すと、ラウルの部屋へ向かった。

「ちよつ……」

ユリウスは声を掛けようとしたが、後方の扉からウォルスが出てきたので言葉を止めた。

部屋の扉を叩く音を聞き、ユウは扉を開いた。すると、そこにはいつも以上に厳しい面持ちのジェスが立っていた。

「どうぞお入りください」

ユウは部屋の中にジェスを迎え入れると、お茶の支度をするためにキッチンへと向かった。

「ジェス殿、どうかされましたか？」

ソファーに腰掛けていたラウルはジェスの顔を見ると、座りなおして尋ねた。

「ウォルスたちが表立って動き始めた。君が国王にならない場合は私とウォルスで投票が行われる。……そして、おそらくその前に私は消されるだろう」

ジェスはラウルの正面に座った。

「私が国王になった場合は？」

ラウルは手を組むと、あごに手をあててジェスに尋ねた。

「君を殺した場合、黙っていない兵士が大勢いる。やつらは暗殺をもくろむだろうが、実行に移すのは困難だろう。君を殺せば、自分も死ぬのだから」

ラウルはジェスの言葉を聞き、想定どおりの答えに深くうなずいた。沈黙が続いた。ユウはお茶を出すと、邪魔にならないように部屋の奥へと移動した。

「君はウォルスを殺めるつもりだろう。確かに国王が元老を殺めるのは国民に不信感を抱かせる。しかし、このまま奴が国王になったら、手が出せなくなるかもしれない」

ジェスは小声で話した。

ラウルは静かに目を閉じた。

「私的なことですが、今月にも私はユウと結婚するつもりです。彼女を陰謀の渦中に置きたくない」

ラウルは口を開いた。すると、ジェスはクスツと笑みを溢した。

「それはめでたい。戦争が終わったとはいえ、この国の傷は深い。

この手の話は皆が喜びに溢れるだろう。是非とも式は大々的に行ってくれ」

ジェスは自分のことのように喜んだ。

「さっきの話は忘れてくれ。私が何とかしよう」

ジェスは席を立つと、穏やかな表情で言った。

「やはり、私はあなたが国王になるべきだと思う。無論、今回の件を放棄するつもりありません。できる限りのことはさせて頂きます。今度の集会では私を初めとする多くの兵士があなたを支持していると発表しましょう。そうすれば、やつらも迂闊には手が出せな

い。あなたの身に危険が迫る前に終わらせませす」

ラウルは終始顔を強張らしていた。

「頼もしい言葉だ」

ジエスは穏やかに笑みを浮かべた。

「お幸せに」

ジエスはラウルと握手を交わすと、ユウに会釈をして部屋を出て行った。

三日後、ジエスは元老を緊急収集した。

「今日はどうされました？ ラウル殿の説得はできましたかな？」

ウォルスは説得できていないことを確信していた。

「いえ、できませんでした」

ジエスが答えると、ウォルスは冷笑を浮かべた。

「仕方ない。それでは以前お話しした通り、ジエス殿とウォルス殿で新国王を決める投票を行うということでもよろしいですか？」

ユリウスが提案すると、

「では、四日後の集会で投票を行いましょう」

元老の一人が声を上げて、皆は了承した。そして、会議が終わろうとしたとき、ジエスが覚悟を決めたように発言した。

「ウォルス殿を国王にすることはできない。国王には私になる」

唐突な言葉に一同はどよめいた。

「私はすべてを知っている」

ジエスが続けると、ウォルスの目がみるみる変わった。

「すべてを終わらせよう」

「ああ。そうしよう」

二人の間を不穏な空気が立ち込めた。

アーヴァンを含む三人以外の元老は首をかしげた。ジエスは二人を睨み付けると、その場を後にした。

「お待ちください、ジエス殿」

例のごとくユリウスが後を追ってきた。ジエスは大きいため息をつ

くと、足を止めた。

「私といると本当に殺されるぞ」

「覚悟はできています。一緒に戦わせてください」

ジェスはユリウスの言葉を聞くと、困惑した表情で振り返った。しかし、ユリウスの真剣な顔を見ると、ジェスは彼を信頼することに決めた。

「ジーク国王暗殺の黒幕はウォルスだ。しかし、それを決定付ける証拠がない」

「では、なぜあのような発言をしたのですか？ かえって危険なのでは？」

ジェスは顔を強張らせてうなずいた。

「これは賭けだ。これで奴は投票までに行動を起こすしなくなつた。その慌ただしさに乗じて証拠を掴み取る」

「しかし、危険です。もつと時間をかけて調べれば証拠も出てくるのではないですか？」

ジェスは足を止めると、深く息をした。

「私が死ねば、きっとそれが証拠になる。それに……」

ジェスは穏やかな顔で首を横に振った。

「今月、ラウル殿が結婚するそうだ。彼が安息の生活を送れるように早期決着を付けたいんだ」

ジェスは終始優しい顔であった。ユリウスはジェスの気持ちを察した。

「では、投票まで共に居させてください。調査も手伝います」

「必要ない。ただ一つ、頼みがある」

「何ですか？」

「証拠を掴んだら、すぐに路地裏にある教会のマリア像に隠しておく。私の身に何かあったらそれを国王軍のレンブランに渡してくれ。ラウル殿には内密に」

その言葉を聞いてユリウスは首を傾げた。

「ラウル殿ではなくていいのですか？」

「ああ。彼を巻き込みたくない」
ユリウスは不満そうな顔を浮かべた。すると、ジェスは優しく微笑み肩を叩いた。

ジェスが最後にラウルの部屋を訪ねてから一週間が経った。投票が行われると聞いたラウルはジェスを支持する意思を伝えるべく集会場へ向かうための準備をしていた。すると、例のごとく部屋の扉を叩く音がした。

（やれやれ、また使者か）

ラウルはため息をつく。扉を開けた。すると、いつもの使者とは異なり、そこにはユリウスが立っていた。

「元老自らいらして頂いて申し訳ありません。今、集会場へ……」
ユリウスは終始うつむいていた。

「どうかされました？」

ラウルがユリウスの顔を覗き込むと、ユリウスは涙を溢していた。
「これをレンブラン殿に渡すようにジェス殿に頼まれたのですが、やはりあなたに渡すべきだと思いました」

ユリウスは震える声で言うと、手紙と封筒をラウルに差し出した。
ラウルは懸念を抱きつつそれらを受け取ると、手紙を開いた。

『我が同士レンブランへ』

この手紙を読んでいるということは、私は息子あるいはウォルスの手に掛かって死んでいるだろう。こうなることはわかっていたことだ。先日、ウォルスに向けてすべてを知っていると聞いた瞬間、奴の目の色があからさまに変わった。

証拠となる資料は元老内で唯一信用できる者ユリウスに預けておいた。それを受け取り、奴らの悪事を明るみにして欲しい。

自分の手でそれをできなかつた私を許して欲しい。無力な私を。

ユリウスもその命、狙われるであろう。どうか、彼の保護をよろしく頼む。

ジーク国王が即位していたときのような栄華ある時代が復活することを祈って

ジェス・ヴァレンシユタイン

追伸、ラウル殿には内密に事を運んで欲しい。彼は幸せを掴もうとしている。彼を巻き込むべきではない』

青ざめるラウルを見て、ユリウスが口を開いた。

「ジェス殿は元老たちを緊急招集しました。その席でジェス殿はウオルスに対してすべてを終わらせようと……」

「なぜそのような危険なことを？」

「ラウル殿が気負いなく結婚できるように、ラウル殿が安息に身をおけるように、ジェス殿はあなたの力を借りず全てを終わらせようとしたのです」

ラウルは愕然とし、肩を落とした。

（バカな。あなたが死んでしまっただけは何の意味もない）

ラウルは手紙を握り締めた。

「レンブランを呼んできてくれないか？ 私は資料に目を通す」

ラウルはユリウスに指示を出すと、ソファーに腰掛けた。

（これがラウルか）

ユリウスはラウルの顔が兵士のものになると身震いをした。そして、次にラウルと目が合うと、ユリウスは逃げるように部屋を飛び出した。

ラウルが資料にざっと目を通し終わると、ユリウスに連れられてレンブランが部屋を訪れた。

「話は聞いた。資料の具合はどうだ？」

レンブランが尋ねると、ラウルは資料をテーブルの上に置いた。

「アーヴァンのジーク国王暗殺は立証できるが、ウオルスの関与は難しいかもしれない。とりあえずアーヴァンを捕縛して、拷問をかける。同志たちにアーヴァンの行方を調べてもらってくれ」

「もうやっている。ウォルスとアーヴァンから目を離すなど指示を出しておいた」

レンブランは固くなった表情を緩めるとジェスの資料を手を取った。「頼もしいな。では、同志たちに臨戦態勢を整えるように指示しておいてくれ。数名はユリウス殿の保護だ」

ラウルが言うのを聞くとすぐさまユリウスが声を上げた。

「待ってくれ、私も戦う」

「やつらはプロの傭兵や武術の使い手を雇っている。素人が出る幕ではない」

ラウルが押さえつけるような強い口調で言い放つと、ユリウスは恐縮した。そして、歯を食いしばり、うつむいた。

「すぐに手配しよう」

レンブランはユリウスの肩を軽く叩くと、ラウルに向かって小さくうなずいた。

「資料に目を通したい。借りていいか？」

「ああ」

ラウルの返事を聞くとレンブランはユリウスを連れて部屋を後にした。

レンブランが部屋を出てゆくと、キッチンから心配そうな表情を浮かべたユウが出てきた。

「もう誰も殺めないという約束……守ってくれますか？」

「……ああ」

ラウルはユウのほうを見ることなく、冷やかな目で答えた。そして、寝室に入ってゆくと、鎧を装着し始めた。ユウは胸騒ぎが止まらなかった。

日が沈む頃、完全武装したレンブランが再度ラウルの部屋を訪ねた。

「アーヴァンは見つかったか？」

ラウルはソファアに腰掛け、手をあごに当てると落ち着いた口調で尋ねた。

「ああ、見つかった。城下町の路地裏、奥に昔使われていた教会があるんだが、そこに潜伏しているようだ」

「そうか。おそらくジェス殿が隠したこの資料を探しているのだろう。それで、こちらの準備は？」

「万端だ。教会を包囲している」

ラウルはゆっくりと立ち上がると、剣を腰に携えた。

「では、行こう」

ラウルは横で心配そうに立ち尽くすユウと目を合わせることなく、足早に部屋を出て行った。

「お願い。あの人に殺しをさせないで」

胸元で手を組んだユウは涙を溜め、震える声でレンブランに頭を下げた。

「……あ、ああ」

レンブランは躊躇いながら答えると、急いでラウルの後を追った。

ラウルとレンブランが路地裏に到着すると、大勢の兵士が教会を取り囲んでいた。

「みんな、すまない。せつかく戦争が終わったのにこんなことに狩り出させて」

ラウルは皆の顔を見回した。

「何をおっしゃいます、ラウル殿？ 私たちはまたあなたと戦えて嬉しいんですよ」

サジェスは兵士たちの影から姿を覗かせると、優しく微笑んだ。

「そうそう。家にも女房にあれこれ言われるだけですから」

「まったく。あれやれ、これやれ、こき使われてたまらない」

兵士たちはそれぞれの思いを口にすると、互いに声を上げて笑った。（みんな幸せそうだな。……この笑顔、失わせてはならない）

ラウルは一瞬穏やかな表情を浮かべたが、それはすぐさま表情を締めさせた。

「策は必要ない。中央から突破して勝利を掴みとる。サジェス殿を始めとする数名は元老ウォルスの家に向かい、奴の行動を監視して

くれ。不審な動きがあつたら拘束してかまわない」

ラウルは声を張り上げると、サジェスの目を見た。

「ウォルスは国王暗殺を始めとする一連の事件の首謀者だ。気をつけてください」

「わかりました」

サジェスと兵士たちは表情を引き締めると、すぐさまウォルスの家へと向かった。

ラウルが路地裏を歩いてゆくと、兵士たちは道を開け、ラウルに敬礼をした。

「今日の戦が今回の戦争の終着点となるだろう。皆、今一度力を貸してくれ」

ラウルが声を上げると、兵士たちは剣を掲げた。

「一度でも二度でも貸しますよ」

「そうだ。あなたのためならみんな親の死に目を見られなくても駆けつけますよ」

兵士たちは大いに笑った。

「やつらが逃げ出せないように最低限の兵士で教会の周囲を固め、残りの兵士は教会内に突入する。三波で突入。一波は全面交戦、二波は弱ったところに追いつちをかけて止めを刺す。三波は万が一に備えて入り口にて待機。比率は六対三対一だ」

ラウルが指示を出すと、兵士たちは誰に言われたわけでもなく、しかし、あらかじめ決まっていたかのように迅速にそれぞれの配置に就いた。

「ラウル、お前は三波にいてくれ。俺は一波で突入し、状況報告と兵士たちへの指示を行う」

レンブランが提案すると、ラウルは大きく首を横に振った。

「お前が三波で俺が一波だ」

ラウルはそう言うと、先頭に行こうとした。

「ラウル、お前には帰りを待つ人がいる。ユウにお前のことを頼まれているんだ」

レンブランはラウルの腕を掴むと、必死に説得をした。

(約束、守ってくれるのですか?)

ラウルはユウの言葉を思い出すと立ち止まり、こぶしを強く握った。
「ラウル、お前が先陣を切る必要なんてないだろう? それに俺たちが殺られるわけがない」

レンブランが言うと、兵士たちは振り向き、グツと親指を立てた。

「……わかった。しかし、少しでも劣勢になったらすぐに飛び込むぞ」

「ああ、わかった」

レンブランは安堵の表情を浮かべると、先頭へと歩いていった。

「さあ、突撃だ。ここ半年、アーヴァンの周辺を調べた結果、奴は傭兵を雇っているようだ。中には戦場を体験している者もいるだろう。くれぐれも気を抜くな」

レンブランは表情を締まらせ言い放つと、剣を抜いて真上にある月めがけて掲げた。

鼓動さえもこだましそうな静けさの中、それを斬り裂くかのごとく教会の入り口めがけて剣を振り下ろすと、

「突撃」

大声で兵士たちに指示を出した。

「オオー」

兵士たちは声を上げると、地鳴りのような音を立てて入り口に向かっていった。

入り口の扉は固く閉ざされていたが、兵士たちは瞬く間に扉を破ると、中へと進入していった。レンブランもまた、扉が開くのを確認すると教会内へと入っていった。

(レンブラン、頼んだぞ。カイ、力を貸してくれ)

ラウルは心配そうに見つめながら、胸元のロケットを握りしめた。

レンブランが教会の中に入ると、すでに国王軍の兵士たちとアーヴァンの雇った傭兵が剣を交えていた。

「どうした? お前たちの安息を奪った憎き国王軍だぞ。気合を入

れて戦え」

アーヴァンは左奥にある二階へと続く階段の上で微笑を浮かべていた。

「アーヴァン、貴様」

レンブランは歯を噛み鳴らすと、階段へと向かった。しかし、すぐさま傭兵の一人に道を塞がれた。

「行かせぬ」

その男が剣を構えると、周囲の空気が途端に重くなった。レンブランは直感でその男が傭兵の中で一番強いことを理解した。

「あなたは思い違いをしている。あなたが守ろうとしている男は戦争の黒幕だ」

「家族を殺したのはお前たち国王軍だ。あの男ではない」

男はそう言くと、突きを繰り出した。レンブランは剣を払うと、先ほどよりも一歩多く距離を置いた。

「詫びる言葉が見つからない。戦争中とはいえ、許されるとも思わない。しかし、あの男を野放しにしておく、何度でも戦が起きる。何度でも同じような犠牲者が出るんだ」

レンブランは説得を続けた。

「ならばこの戦いを終えた後、奴も斬り捨ててみせよう。だから、安心して逝ね」

男はレンブランを睨みつけると剣を強く握り締め、レンブランを斬りつけた。レンブランは必死によけると、覚悟を決めて剣を握った。「仕方ない。今日この場ですべてのかたを付けさせてもらおう」

レンブランは剣を掲げて第二波突入の合図を出すと、そのまま剣を男に振り下ろした。

第二波が突入すると、ほとんどの傭兵は取り押さえられ、国王軍は勝利を目前とした。

「諦めて降伏しろ」

レンブランは交えた剣の隙間から、険しい顔つきで言い放った。

「くっ……」

男は悔しさに顔を歪ませた。

レンブランは一瞬の隙をつくると、男の剣を払い飛ばした。そして、柄で胸を突いた。

男はその場で倒れこんだ。

「そこまでだ。誰か、この者を拘束してくれ」

レンブランは剣を男に突きつけると、仲間の兵士に男を拘束させた。そして、階段の上へと目を向けた。しかし、そこにはアーヴァンの姿はなかった。

「しまった」

レンブランは階段を駆け上がると、開いた窓から外を覗いた。すると、壁に囲まれて、外の兵士が包囲しきれなかった狭い通路をアーヴァンたちが走って行くのが見えた。

「壁と壁の間から逃げたぞ。追え」

レンブランは裏にいる兵士に指示を出すと、窓から下に降り、アーヴァンの後を追った。

拘束された男は一瞬の隙をつくると兵士たちを払いのけた。そして、足元に隠しておいたナイフを抜くと、レンブランの後に続いて走っていた。

アーヴァンは側近二人に前後を守らせると、全力で狭い道を駆け抜けた。

「危機一髪だったな。傭兵め、高い金を出したのに少しも役に立たない。資料こそは見つからなかったが、しばらくウォルス殿にかくまってもらおう」

アーヴァンは拓けた場所を目前にすると、笑みを浮かべた。

「かくまってもらえますかね？」

「もちろんだ。私が捕まればウォルス殿も終わり。父上は私の悪事の証拠を持っていったようだが、私はウォルス殿の悪事を裏付ける証拠を持っている。私に宛てたジーク前国王暗殺の依頼書だ。あの方が私を裏切るうとしたときの保険に取っておいた」

アーヴァンは満面に笑みを浮かべた。しかし、出口付近に人影を見

ると、直ちに表情を強張らせた。同時に側近二人はアーヴァンの前
に出て、剣を構えた。

「誰だ。出てこい」

アーヴァンが声を上げると、その男はゆっくりとアーヴァンに歩み
寄った。

「ラ、ラウル」

月明かりに照らされて、ラウルが姿を現せた。

「貴様ごときの考えなどお見通しだ。先ほど話していた証拠とやら、
こちらに渡してもらおう」

ラウルは剣を抜くと、地面すれすれまで剣先を下げてゆっくりとア
ーヴァンに近づいた。

「お前たち、まだ相手は一人だ。援軍が来る前にこいつを斬り捨て
て逃げるぞ。かかれ」

「はい」

側近たちは返事と同時にラウルに斬りかかった。

ラウルは剣の柄を両手で握ると、力強く振り上げた。側近二人は
各々の剣でラウルの剣を受け止めたが、剣圧に押されて体ごと後方
へ弾き飛ばされた。

「所詮、殺し合いは素人。本気で我々に勝てるつもりだったのか？
ラウルは呆れ顔を浮かべた。

「おい、何をしている？ 早く立ち上がって奴を殺せ」

アーヴァンが呼びかけても二人とも立ち上がるうとしなかった。ま
るで蛇に睨まれた蛙のようにビクビク震え、決してラウルのほうを
見ようとしなかった。

「無駄だ。こいつらも曲りなりに闘いに生きてきた男、今の一撃で
俺には敵わないことを悟っただろう」

話しながらゆっくり歩み寄るラウルから、アーヴァンは普段感じら
れない威圧感を感じた。

「く、来るな」

アーヴァンは震えた手で剣を抜くと、剣先をラウルに向けた。

「貴様の探している証拠は我が手にある。もう諦める」

ラウルは動作もなくその剣を弾き飛ばすと、アーヴァンの肩に剣を置き、首に突きつけた。

「証拠ならやる。だから、見逃してくれないか？」

アーヴァンは膝をつくと、胸元からしわしわになった封筒を取り出した。ラウルはそれを受け取ると、剣を地面に突き刺した。そして、早速中身の確認をした。

「……なるほど。これがあればウォルスを捕まえることができる」

「だ、だろう。それをやるから見逃してくれ」

ラウルは深くため息をつくと、首を横に振った。そして、同時に封筒を鎧の中にしまった。

「ジーク国王とジェス元老を殺したのは貴様か？」

ラウルが問うと、アーヴァンはうつむいて目を泳がせた。

「貴様か？」

ラウルは剣でアーヴァンのおごを持ち上げると、再度尋ねた。

「……あ、ああ。父はいつも私を見下し、いつまでも元老の任に就かせようとしてくれなかった。しかし、ウォルス殿はジーク国王を殺せば、己の権力で元老に任命して下さると、父を殺せば国王の座に就いた際に側近として近くに置いて下さるとおっしゃった」

「己の名誉のために戦争を引き起こし、実の父にまで手をかけたのか？ 貴様のせいでどれ程の人が犠牲になったと思っっている？ どれ程の人が悲しみを背負ったと思っっている？ 貴様のせい俺は大勢の罪なき人を、仲間を、親友を殺してしまったんだ」

ラウルは自分が殺めた多くの人、クリスやその家族、そして、カイのことを想った。

ラウルは歯を食いしばると、剣をアーヴァンの頭上に掲げた。

「止める、ラウル」

レンブランは今にもアーヴァンを斬り殺そうとするラウルを見て、必死に声を上げた。

「止せ、止めてくれ。た、助けてくれ」

アーヴァンは腰を抜かしながらも後ずさりをする、自分の側近に助けを求めた。しかし、側近は怯えた表情で首を横に振った。

(ユウ、すまないが約束は守れそうにもない)

ラウルはゆっくりと剣を振り下ろした。その瞬間、レンブランの後ろで何かが光った。

サジェスと兵士たちはウォルスの邸宅に到着すると、木陰に息を潜めた。

正門の前には見張りが二人立っていた。

「半分は裏口に周って見張りをしてくれ。不審な動きをする者がいたら有無言わず取り押さえて構わない」

サジェスたちは見つからないように姿勢を低くすると、サジェスは小声で兵士たちに指示を出した。兵士たちは小さくうなずくと、その半分はさつそうと邸宅の裏へと回った。

しばらくすると、一人の男が慌てた様子でウォルス邸へ駆け込んだ。その男は見張りの男と話をする、門の中へと入っていった。

「何事でしょう？」

サジェスの隣にいた兵士が尋ねると、サジェスはあごに手を当てた。「おそらくアーヴァンが拘束されたのだろう。ウォルスが動き出すかもしれない。念のため裏に回った者たちに戦闘の準備をするよう伝えてくれ」

「はい」

兵士は返事をする、裏口へと回った。それと同時にウォルス邸の門からは武具を装備した兵士が十数名出てきた。

「こちらと同じくらいの数でしょうか？」

「いや、中にはもっといるだろう。忙しくなるぞ」

サジェスは門に鋭い視線を送った。

すると、間もなく門が開いた。そこには兵士に囲まれて護衛されたウォルスの姿があった。

ウォルスは一人だけ馬に乗り、先導する兵士に手綱を引かれてゆ

つくりと出てきた。

「裏にいる兵士の半分はこちらへ戻るよう伝えてくれ。残りは裏から潜入。挟み撃ちにして逃げ場をなくせ」

サジェスは横にいる兵士に指示を出した。兵士はうなずくと駆け足で裏へと向かった。

「只今より我々はウォルスの拘束に向かう。私に続け」

「はい」

サジェスは剣を抜くと、ゆっくりと門に向かって歩きだした。

「誰か向かってくるぞ」

門の前に立っている兵士の一人がサジェスの姿に気づくと、声を上げた。

ウォルス側の兵士たちは剣を構えると、臨戦態勢を整えた。

「何者だ」

ウォルスは声を上げて尋ねた。

「初めまして、ウォルス殿。私は国王軍のサジェスと申します」

サジェスは自軍の兵士たちをその場で立ち止まらせて、強かに微笑みながらゆっくりと歩み寄った。

「悪いが挨拶をしている暇はないのだ。君の同僚のラウルが気違いにもアーヴァンを殺したらしい。その上、どういう訳か次は私の命を狙っているという」

ウォルスの話を聞きながら、サジェスは尚も微笑を浮かべながら近づいた。

「サジェスとか申したな。戦果は聞いている。ここに留まり、後に来るであろうラウルを拘束してはくれないか？ もちろん礼は弾む」
サジェスが門の近くまで行くと、兵士の一人に止められた。すると、サジェスは剣でその兵士を叩き伏せた。

「残念ですが、私はそのラウル殿の命であなたを拘束しに来たのですよ。ウォルス殿、おとなしく捕まってください」

サジェスの言葉を聞くなり、兵士たちがサジェスに斬りかかった。

サジェスはその剣を弾き落とすと、自軍の兵士に突撃の合図を出

した。兵士たちは待っていたと言わんばかりに、サジェスのもとへ全力で駆け寄った。

「ウォルス様、裏からお逃げください」

馬を先導していた兵士が言うと、ウォルスは手綱を強く握った。そして、数名の兵士と裏へと向かった。しかし、すぐに裏から潜入した国王軍の兵士たちと鉢合わせた。

「抵抗は止めて降伏しろ」

兵士の一人が言うと、ウォルスは鼻で笑った。

「抵抗？ 貴様たちが勝手に襲い掛かっているだけではないか。証拠もなしに大それた口を利くな。お前たち、早くこいつらを片付けて道を開ける」

ウォルスの櫓が飛ぶと、兵士たちは慌てて斬りかかった。国王軍の兵士も剣を抜くと、正面から迎え撃った。

ウォルスを守る兵士たちは徴兵制度で出兵したが、まだ訓練途中の者ばかりであった。剣の振りは鈍く、鎧の重さに体がついていないかった。

サジェスたちは間髪入れぬ間にウォルスの兵士を叩き伏せると、先ほどから声が聞こえる裏側へと向かった。すると、すぐ近くで狼煙が上がった。

「何をしている。早くしろ」

ウォルスは懸命に櫓を飛ばすが、なかなか道が開けずにいた。すると、入り口から大勢の足音がした。

当然自軍の兵士とは思えないウォルスは、馬の腹を強く蹴り強行突破を試みた。

「馬が来るぞ。ウォルスを引きずりおろせ」

国王軍の兵士たちは馬に神経を集中させた。そして、一人が馬の足を斬りつけた。馬は跳ね上がり、暴れまわった。

「お、落ち着け」

ウォルスは必死に手綱を握ったが、ついには振り落とされてしまった。

「ウォルス様を護衛しろ」

兵士たちは慌てて国王軍に斬りかかった。国王軍はウォルスを捕らえようとしたが、剣を受けざるを得なかった。

ウォルスは交わる剣の合間を縫って、逃げるように裏口へと駆けていった。しかし、その様子を見ていたサジエスはまったく追う気を見せなかった。

「サジエス様、このままだと逃げられます。早く追いかけてみましょう」
「必要ない。我々の勝利だ」

サジエスは得意気に笑った。兵士は戸惑いを浮かべたまま、逃げるウォルスの背中を見つめた。

裏口から出て行ったウォルスが後ずさりしながら戻ってきた。そして、同時にラウルたちが姿を見せた。

「ラ、ラウル。こんなことをして、ただで済むと思っているのか？

これは大罪だぞ」

ラウルは滑稽といわんが如く笑って見せた。

「大罪を犯したのはどちらですか？」

「何のことだ？」

ウォルスはあくまでしらを切った。

「ウォルス殿がアーヴァンに送った、ジーク国王殺害の依頼書が見つかりました」

ラウルの言葉を聞くと、ウォルスは忽ち目を泳がせた。

「し、知らん。それは偽物だ。元老の誰かが私をはめようとしているのだ。……そう、ユリウスだ。奴こそがすべての元凶。自分が

国王になるために仕組んだ罠だ」

ラウルは首を振り、哀しそうにウォルスを見下した。

「もうしゃべってくれな。今ここですべてを終わらせましょう」

ラウルが自分の剣に手を掛けると、レンブランはすぐさま柄を押さえた。

「お前は剣を抜くな」

レンブランはラウルの肩に手を当て、後方へと押し退けた。そして、

自分の剣を抜くと、ウォルスの喉元に突きつけた。

「諦める。アーヴァンの持つていた証拠を分析すれば貴様が黒幕であるとすぐに立証できるだろう。降伏すれば命まで取るうとは思わない」

「……くそ、アーヴァンの間抜けめ。処分したなどと嘘つきおつて」
ウォルスは膝をつくと、地面を何度も叩いた。

「人を従わせるのは心だ。権力でも金でもない。それがわかっていれば当の昔に国王の座に就いていただろう」

「小僧が知った口を利くな。ジークは私からすべてを奪ったのだ。国王の座を目前としていた私が落選した途端、私の妻はジークに言い寄った。妊娠していた私の子供を中絶してまで……ジークは国王の座だけでなく、子供も愛する者も奪ったのだ」

ウォルスは地面に拳を埋め込ませ、ラウルとレンブランを睨み付けた。そして、ゆっくりと立ち上がると、覚束ない足取りで邸宅へと歩いていった。

「ジークは彼女の申し出を断り続けた。彼女は私の元に戻ってきたが、フハハハハ、首を絞め殺してやったよ」

ウォルスは両手を広げ、天を仰いだ。

「ただの逆恨みではないか。壊れているな」

レンブランは眉間にしわを寄せると、うつむき首を横に振った。

ウォルスは窓に反射するレンブランの姿を見てニヤリと笑った。

「ああ、私は壊れている」

ウォルスは窓の外から家の中に飾ってある妻の肖像画を見つめ涙を溢した。

「降伏しろ。そして、償え」

ラウルは優しい口調で声を掛けた。

「人の罪というものは償えば消えるものか？ 我々は大勢を殺した」
ウォルスの言葉に国王軍の皆がうつむいた。その一瞬にウォルスは窓ガラスを叩き割ると、その破片を自分の心臓に突き刺した。

「……もう、疲れた。すまなかつたな。少年たちよ。辛い思いをさ

せた」

ウォルスは深々と頭を下げると、膝をつき、そのまま地面に倒れこんだ。ラウルたちは慌てて駆け寄ったが、ウォルスの息はすでに途絶えていた。

「死は償いになるのか？」

ラウルは複雑な顔をして唇をグツとかみ締めた。そして、静かにウォルスのまぶたを閉じた。

「……ラウル、行こう」

レンブランはラウルの腕を引っ張った。

「後処理はやっておきましょう。ラウル殿を休ませてあげてください」

「ああ、お願いします」

レンブランはサジェスに後を任せると、うつむき疲れた表情を浮かべたラウルを連れてその場から立ち去っていった。

「俺が国王になっていれば…… もっと早く動けば、ジェス殿は……」

……俺はどこまでも馬鹿だ」

「過ぎたことだ。戦いは終わった。今は休み、これからのことに目を向けよう」

レンブランはラウルの肩を叩いた。

ラウルは顔を上げると、一つうなずいた。

裏切り

穏やかな朝日が窓から差し込む部屋で、ユウはソファアに座わりながら、号外として配られた一枚の紙を眺め、手を震わせた。

『ジーク国王暗殺の黒幕は元老ウォルスと元老アーヴァン

戦争が終結して早半年以上の月日が流れた。しかし、ここで目を疑いたくなるような事実を皆に伝えなくてはならない。ジーク国王暗殺の首謀者とされていた革命軍創始者ジェルドはジーク国王の友人であり、国王暗殺の犯人ではなかったということである。

ジーク国王暗殺は元老ウォルスが企て、同じく元老アーヴァンが実行していたことが、ラウルの率いる国王軍と殺害された元老長ジェスの捜査によって明らかとされた。

ラウルは過の戦争で革命軍の本拠地シタデルへ攻め込んだ際、革命軍の長ジェルドより元老による国王暗殺の話聞いた。そして、ラウルはレンブランを始めとする国王軍と共に元老長ジェスと捜査に至った。

その結果ジーク国王の暗殺はウォルスとアーヴァンによるものであることを突き止めた。

当時証拠を保持していた元老長ジェスは、実の息子アーヴァンによって刺殺された。彼は元老のユリウスに証拠を預け、息を引き取った。

ラウルは元老ユリウスより証拠の書類を受け取ると、国王軍を召集してアーヴァンを捜索した。そして、城下町路地裏にある教会にいたこと突き止めると包囲、突入した。国王軍はアーヴァンが雇ったと思われる傭兵と戦いとなったが、間もなく降伏させた。そして、元老長ジェスを殺したアーヴァンには英雄ラウルによる正義の鉄鎚が下ることとなった。

それから数十分後、ウォルスも国王軍によって包囲された。逃げ場を失ったウォルスはラウルと国王軍の前で自害した」

(……嘘だ。もう人は殺さないとラウルは約束してくれた)

ユウは自分に言い聞かせるように何度も首を横に振ると、紙をテーブルに置いた。ラウルは静かにその様子を寝室から見ている。そして、ユウが立ち上がるのを見計らってリビングへ入っていった。

「お、おはようございます」

ユウが震えた声であいさつするとラウルは悲しげな顔をした。

「すぐに朝食の準備をしますね」

ユウはラウルとは目を合わそうとせず、その場を立ち去ろうとした。「いや、いい。昨日のことで元老に呼ばれているから、少し出てくる」

ラウルは静かに言い放つと、足早に部屋を出ようとした。ユウはハッとした表情を浮かべ、ラウルにしがみ付いた。

「ごめんなさい。あなたを疑ってしまいました」

ラウルは一瞬躊躇いを感じた。

「……それに書かれていることが真実だとしたらどうする？ 結婚を辞めるか？」

ラウルは自分の背中で震えるユウに対して、あくまで冷静に言葉を返した。

「あなたが殺したの？」

ユウは声を上げると、大粒の涙を溢し始めた。ラウルは天井を見上げると、静かに目を閉じた。

しばらくの沈黙が続いた。

「私が殺した」

その一言でユウの表情が一変した。それは困惑、悲しみの中に、憤りを感じさせる、複雑な表情であった。

「……ひとまず、私は国王になる。王位継承式は三日後の結婚式と同時にを行う。それまでに結婚するかどうか決めといてくれ」

ラウルの言葉を聞き、ユウは悔しそうにその場で泣き崩れた。しかし、ラウルは一度も振り返ることなく部屋を出て行った。

（お兄ちゃん、私はどうすればいいの？）

ユウの大粒の涙が静かに床を濡らした。

「では、希望通り結婚式の日にはラウル殿の王位継承式を執り行います。他の元老方々、よろしいですね？」

「はい」

新たに元老長の任に就いたユリウスが提案すると、満場一致でラウルの国王就任が決まった。

「急なことで恐縮ですが、よろしくお願いします」

ラウルは深々と頭を下げた。そして、ユウの様子が気になったラウルは、さっそうと集会場を後にした。

ラウルが部屋に戻ると、朝食の準備がされていた。しかし、どこを見渡してもユウの姿はなかった。

ラウルはため息をつくとき、朝食を食べるために席へついた。すると、一枚の書置きを見つけた。

『しばらく時間をください。結婚式までには気持ちを決めたいと思います。』

ユウ』

手紙を読んだラウルは再度息をついた。そして、一人静かに朝食に手をつけた。

翌朝、レンブランがラウルの部屋を訪ねると、ラウルは朝食の仕度をしていた。

「何をやっているんだ？」

レンブランが目を丸めて尋ねると、ラウルは照れくさそうに笑った。

「朝食の仕度さ。ユウが出て行ってしまっただけ。よかったら一緒に食べていかないか？」

ラウルは一生懸命笑顔を作った。そして、食卓に皿を並べ始めた。
「出て行った？ どうして？」

ラウルは静かにうつむいた。

「アーヴァンは俺が殺したと告げた」

「では、ユウはお前が約束を違えたと思っっているのか？ なぜそのような嘘を？ ユウはお前を信じていたんだぞ」

ラウルは悲しそうな目を見ると、首を横に振った。

ラウルは眉間にしわを寄せ、目を伏せた。

「私は国王となる。今回のようなことが起これば自らの手ではなくとも誰かを殺めることにもなるだろう。それは私が殺しているようなものだ。……ユウとの約束はいずれ破られる約束。この程度で壊れるような関係なら、どの道うまくいかないさ」

「なぜ破られる約束と決め付ける？ 約束とは守るべきものだ」
レンブランは納得いかない表情であった。

ラウルは優しく微笑むと、再度首を横に振った。

「あの時、俺は確かにアーヴァンを殺そうとした。ユウとの約束より、戦争で犠牲となった者への想いのほうが増しているんだ。この国を脅かす者が現れたら、やはり私はその者に死を宣告するだろう」
ラウルは食事の仕度を済ませると、席に着いた。

「さあ、食べていってくれないか？」

ラウルは明るい声でレンブランに勧めた。

「……ああ」

レンブランが席に着くと、二人は黙々と食べ始めた。

二人は食事を済ませると、相変わらず黙ったまま向かい合った。

「レンブラン、頼みがあるんだ」

ラウルは指を組むと、レンブランの顔を覗き込んだ。

「何だ？」

レンブランは顔を上げた。

「城の北にある丘を越えると孤児院がある。そこのシスターに手紙を渡してきてはくれないか？ 結婚式の招待状だ」

ラウルは胸元から手紙を取り出した。

「わかった」

レンブランは手紙を受け取った。

「それと、国が落ち着いたら国王の座を任せたい」

ラウルはやつれた顔をしていた。

「ああ」

レンブランは静かにうなずくと、席を立った。ラウルもまた席を立つとレンブランを見送った。

結婚式当日、ラウルは窓の前で夜明けを迎えた。

（俺のついた嘘は間違いか？）

ラウルはロケットを開くと、カイとシスターに問いかけた。

物音ひとつない部屋でラウルはため息をつく、朝食の仕度を始めた。

ラウルが朝食を終えて一息ついていると、部屋のドアを叩く音がした。

「ラウル様、そろそろ仕度をお願いします」

「ああ。すぐに行く」

ラウルは返事をする、ゆっくり立ち上がった。

ラウルは正装に着替えると、式典が行われる部屋の横に設けられた控え室へ向かった。

「ラウル、約束どおりシスターを連れてきたよ。会場で待っているぞうだ」

先に控え室へと来ていたレンブランは、ラウルが入ってくるのを見るなり声をかけた。

「ああ、ありがとう。……ユウは？」

ラウルが恐る恐る尋ねると、レンブランは穏やかな表情を浮かべた。

「来ているよ。今、別室で着替えている」

ラウルは安堵の顔を浮かべると、用意されている椅子に腰を下ろした。

「そうか、よかった。シスターと一緒に見ていってくれ」

ラウルの顔色が少し良くなった。レンブランはニッコリ微笑むと、大きくうなずいた。

十数分ほど待つと、控え室の扉を叩く音がした。

「ラウル様、準備が整いました。祭壇へいらしてください」

遣いの者の声を聞くと、ラウルは落ち着いた面持ちで立ち上がった。

「では、俺は席のほうで見させてもらおうよ」

「ああ」

ラウルとレンブランは堅い握手を交わした。レンブランが部屋を出ると、ラウルも続いて部屋を出た。

「ユウはもう祭壇へ？」

「ええ。花嫁はすでに祭壇でお待ちです」

遣いの者は深々と頭を下げると、ラウルのつま先を見ながら答えた。

「ありがとう」

ラウルは遣いの者の顔を上げると、笑顔を見せた。

ラウルが祭壇のある部屋へ行くと、そこには多くの人たちが集まっていた。ラウルは一通り辺りを見回すと、うつむき目を閉じた。

そして、一息つくくとゆっくりと目を開け、顔を上げた。

「ラウル様」

「ラウル国王」

ラウルが歩き始めると、その一歩ごとに声が上がった。ラウルは祭壇でうつむくユウを真っ直ぐ見据えて堂々と歩いていった。

ラウルが祭壇の上に立つと、途端に声が止んだ。ラウルはユウの横に立つと、ユウの顔を窺うことなく司教のほうを向いた。

「それでは、まず先にこれより国王就任の儀を行う」

司教が声を上げると、辺りは緊迫した空気に包まれた。

「ラウル・J・クライムよ。汝、如何なるときも国を想い、国を守るためならばすべてを失う覚悟はあるか？」

「はい」

ラウルは司教の目を真っ直ぐ見て答えた。一方でユウは哀しい表情

を浮かべていた。

「それでは、神の名においてラウル・J・クライムを国王に任命する」

司教は祈りの言葉を唱えると、ラウルに王冠を与えた。

「この命、国のために捧げます」

「うむ、精進するように」

ラウルは胸に手を当てた。感慨深いその光景に兵士の多くが胸を震わせた。

「これを以って、ラウル新国王就任の儀とする。皆、盛大な拍手を」
司教が天を仰ぐと、拍手が部屋中にこだました。

ラウルは照れくさそうに笑うと、振り返り笑顔で応えた。そして、一度だけユウの顔を窺った。終始うつむき加減だったユウは顔を上げると、優しく微笑んだ。しかし、その表情はあまりに哀しそうに見えた。

「それでは、これよりラウル・J・クライムとユウ・ランバートとの結婚の儀を行う」

司教は咳払いをすると、皆を静まらせた。

（ユウのファーストネームはランバートと言うのか。夫となるのに、まだ何も知らない）

ラウルは自分を鼻で笑った。しかし、すぐさま疑念が頭を過ぎった。
（……ランバート？ どこかで聞いたことがある）

ラウルは眉間にしわを寄せた。その後方ではレンブランも同様の表情を浮かべていた。

結婚式は順調に進んでいった。そして、いよいよ指輪の交換へと移った。

「それでは、指輪の交換を」

司教の言葉でラウルは指輪を手に取った。そして、ユウのほうを向いた。

「ユウ？ 具合でも悪いのか？」

ラウルは相変わらずうつむいているユウを心配して尋ねると、ユウ

は大きく首を横に振った。

「さあ、左手を出して」

ラウルは小声で話しかけたが、ユウはまったく反応しなかった。ラウルは仕方なしにユウの左手を持ち上げた。そして、薬指に指輪をはめようとした瞬間、ユウはラウルにもたれ掛かった。

「ごめんなさい、ラウル。やっぱり、約束を破ったあなたを許せなかった」

ユウは涙溢れる目でラウルを見た。その表情を見たラウルは、一瞬脳裏にフォヤーズ村の光景が思い浮かんだ。

(この目は…… ランバート？ クリス・ランバート)

横たわるクリスと泣きながら走り寄る少女。そして、涙溢れるその目で、ラウルを睨み付ける。ラウルはフォヤーズ村でクリスを殺したときの情景を思い出した。

「君はクリスの妹か？」

ラウルの声を聞くと、ユウはラウルの胸の中でうなずいた。

「復讐か？」

ラウルは震える声でユウに尋ねた。二人の間には一滴一滴と赤い滴が落ちていった。

「……最初は。でも、過去の話を聞いて、あなたと暮らして、本当にあなたを愛した。約束を守ってくれれば、すべて忘れてあなたと生きようと思った」

ユウは声を震わせながら答えた。

「もう誰も殺めて欲しくなかった」

ラウルはゆっくりと天井を見上げると、強くユウを抱きしめた。

「すまなかった。……すまなかった」

ラウルはひたすら謝った。兄であるクリスを殺したこと、約束を破ったこと、戦時に行った自分の行いまでも、ひたすら謝り続けた。

ユウは抱きしめられる力が強くなるにつれ、ラウルの体の奥深くにナイフが刺さっていった。

ユウは咄嗟に後ろへ飛び退いた。それによって、祭壇の上で起こ

ったことが明るみになった。ラウルの脇腹にはナイフが深く刺さっており、そのナイフを伝って血がこぼれ落ちていた。

「ラウル様」

「きゃあー」

部屋は忽ちパニック状態へと陥った。

「女を包囲しろ。来賓にはこのことを口外せぬよう伝えて一旦外へ出せ」

レンブランは辺りにいる兵士に指示を出すと、祭壇へと駆け寄った。
「動くな」

兵士たちは槍をユウの喉元に突きつけた。

ユウは覚悟を決めたのか、ゆっくりと目を閉じた。

「手を出すな」

ラウルは兵士を怒鳴りつけると、膝を着きながらユウのほうを見た。

「……フォヤーズ村へ帰りなさい。そして、今度こそ幸せになつてくれ」

ラウルはその場に倒れこんだ。

シスターがゆっくりと歩み寄り、ラウルの上体を起こした。

「可哀想な子。戦争で多くを殺してしまい、幼いときから共に育ったかけがえのない家族を殺め、最後には愛する者に殺される。誰よりも優しい子なのに。……なんて可哀想な子」

シスターは涙を溢しながらナイフを抜き、傷口を強く抑えた。その言葉を聞いたユウもまた、あごを振るわせた。そして、居ても立ってもいらなくなったユウは、その場から逃げ出した。

「……行かせてやれ」

何人かの兵士がユウを捕らえようとする、レンブランはすぐさま制止した。すると、ラウルは優しく微笑みながら口を動かした。レンブランにはそれが、ありがとうと言った気がして小さくうなずいた。

救護班が急いでラウルを医務室へと運び込んだ。

「シスター、ラウルについてあげてください」

レンブランは一言告げると、部屋を出て行こうとした。

「彼女を捕らえるのですか？」

「いいえ。しかし、彼女に真実だけは話しておきたい」

レンブランは言葉を残すと、部屋を後にした。

ユウはラウルの部屋へと来ていた。膝を着き、ベッドに顔を埋めると、声を殺して涙を流した。

「お兄ちゃん、私、愛していた人を刺しちゃった。……彼も同じ苦しみを味わって来たのかな？ もし、悔いているなら、許してあげるべきだったんじゃないかな？」

ユウは懺悔のように声を上げた。

しばらくすると、部屋の扉が開いた。ユウは殺される覚悟をして、近づく足音を聞いていた。

「やはり、ここにいたのか」

姿を現したのはレンブランだった。

「覚悟は出来ています。拘束しますか？ それとも、今ここで殺しますか？」

ユウはゆっくりと立ち上がると、ベッドの上に座り直した。

レンブランは大きく息をつくとき、ユウに歩み寄った。

「殺してやりたいさ。しかし、ラウルが手を出すなと言った。安心していい。我々国王軍にとって、彼の言葉は絶対だ」

レンブランは剣を抜くと、寝室の前に突き刺した。

「話したいことがあって来たんだ」

レンブランは哀しい目をしながら、寝室へと入った。

「単刀直入に言おう。ラウルはアーヴァンを殺していない」

ユウはその言葉を聞くと、瞬間に目を泳がせた。

「何を言っているの？」

「号外もラウルが言った言葉も嘘だ。ラウルはお前との約束を破っていない」

レンブランは窓の外を見つめた。

「……一部始終話そう」

ラウルはアーヴァンの頭上に掲げた剣を振り下ろした。しかし、寸前のところで剣を止めた。

『クッ』

ラウルは剣をアーヴァンの横に下ろすと、下唇を噛み締めた。

（カイ、俺はどうすべきだ？ …… ユウ）

ラウルは迷いを浮かべた。

アーヴァンは正気を失い、呆然としていた。

『ウッ』

次の瞬間、アーヴァンは倒れこんだ。ラウルは目を丸くしながらアーヴァンを見ると、その首にはナイフが刺さっていた。ラウルはすぐさまレンブランのほうを見た。

『俺じゃない』

レンブランもまた目を丸めながら首を何度も横に振った。そして、すぐさま、後ろを振り返った。すると、そこにはレンブランと剣を交え、拘束されているはずの傭兵が立っていた。

『そいつを殺すのは俺の役目だ』

男は静かに言い放つと、その場に片膝をついた。レンブランは慌てて男を拘束した。

ラウルはアーヴァンに近づくと、息の有無を確認した。そして、息が無いことを確認すると、首に刺さったナイフを抜いた。その瞬間、フラッシュのようなものが光り、誰かが走り去る音がした。

『待て』

国王軍の兵士が捕まえようと追いかけた。しかし、路地裏は入り組んでおり、とうとう逃げられてしまった。

『すみません』

兵士は膝に手をつくくと、息を切らしながら頭を下げた。

『いや、いいさ』

ラウルは兵士の肩を軽く叩いた。

『しかし、明日にはラウルが殺したという報道が出回るぞ。そうし

たら、ユウだつて……」

『それより、今はウォルスの拘束が最優先だ』

ラウルはレンブランの言葉を遮ると、足早にその場を去った。

「そして、翌朝お前は号外を見た」

ユウは放心状態のまま真っ直ぐ涙を溢した。

「我々はお前を拘束することはできない。ラウルの願いだ。このまま村へ帰るといい」

レンブランは床に刺さった剣を抜くと、鞘に収めた。そして、それ以上何も言わず、ラウルの部屋を去った。

ユウはどうすればよいのか分からず、ベッドに座りながら涙を流した。

(嘘よ。嘘に決まっている)

ユウは信じられないと下唇をかみ締めた。

(本当だとしたら、私はどうすればいいの? ……ラウル)

ユウはベッドの横に置いてあるロケットを開き、三人で幸せそうに笑うラウルの写真を見ると、止めどなく涙を流した。

「お母さんのところに帰らなくっちゃ」

ユウはロケットを大事に握り締めると、思ったように立ち上がり覚束ない足取りで部屋を出て行った。

危害が加えられないよう、城の敷地を出るまでユウは兵士たちに護衛されていた。

「二度この地に足を踏み入れるな」

兵士はユウを力強く敷地の外へ押し出すと、仲間の兵士と入り口を固めた。

ユウは振り返ることなく、ふらつきながら歩いていった。

戦いの果てに

五年後、植民地の者たちが自由を求めて蜂起した。王国は話し合いによる解決を望み、何度もその場を設けたが、植民地側は話し合いに応じようとしなかった。

国王軍はやむを得ず彼らを迎え撃つためにコンサークル高原へ赴いていた。

「国王、いかがなさいましょう。一気に叩き伏せますか？」

戦争を体験するために同行したユリウスは、レンブランの横に立った。

レンブランは空を仰ぐと、深く息をした。

(ラウル、また争いだ)

医務室でラウルと交わした最後の言葉を思い出した。

『我々は何のために戦った？』

ラウルは小さく何度も首を横に振った。

『戦いの果てに何を得る？』

ラウルはあごを震わせると、カ一杯声を上げた。

『しゃべらなくていい』

レンブランはラウルの横で膝をつくと、強く手を握った。

『平和を得たか？ 戦争さえ起こらなければ、元々脅かされることはないものだろう。我々は多くを殺さずに済んだ。多くもまた、殺されずに済んだ。遺族や多くを想う人たちを悲しませることもなかった。愚老の至福を肥やす道具として、命を奪い合っただけだ』

ラウルは歯を噛み鳴らした。

『……そこから得たものは哀しみだけだ。哀しみを得るために、多くを失くした』

ラウルは血を吐くと、脱力した。

シスターは苦しむ息子を見て涙を流した。

『ラウル、ラウル』

レンブランは必死に体を揺すった。力の入らないラウルは為すがまま揺れ動いた。

『戦争を起こしてはならない。頼んだぞ、レンブラン。もう悲劇はたくさんだ』

『ああ、わかった』

目を閉じたまま、かすれた声で言うラウルにレンブランはしっかりと答えた。その言葉を聞いたラウルは深くうなずき、目を閉じた。

「武器を捨てる」

「え？」

ユリウスは自分の耳を疑った。

「再度和解を申し出る。全員武器を捨てる」

レンブランは兵士たちに聞こえるよう大声を上げると、自ら武具を捨てた。

「なぜ？ 圧倒的有利ではないですか？」

ユリウスは納得いかない顔で尋ねた。

「彼らにも大切な人がいることを忘れるな。避けられる戦いは避けるべきだ」

レンブランは悲しい表情で静かに言うと、一人で歩き始めた。

「こちらのほうが圧倒的有利であることは彼らも分かっているだろう」

ユリウスは相変わらず納得のいかない顔をしていたが、国王の意志に従うことにした。

「我々もお供します」

ユリウスを始めとする国王軍はレンブランの後に続いて歩き始めた。レンブランは振り返り優しく微笑むと、力強く歩を進めた。

国王軍が武具を捨てはじめ、植民地側の人間は戸惑いを浮かべた。

「酋長、どういうことでしょうか？ 罠でしょうか？」

「わからん。しばらく様子を見よう」

酋長は腕を組み、レンブランを睨み付けた。

「今一度和解を提案したい？」

レンブランは大きく声を上げた。

「おめでたい奴だ。あの男、戦争というものを知らないのでしょうか」
酋長の横で男は鼻で笑った。そして、後ろにいる弓兵の一人にこっそり合図を出した。

弓兵は弓を高々に掲げると、矢を放った。

矢はレンブランめがけて弧を描いて飛んでいった。そして、レンブランの頬を掠めた。

国王軍は一瞬ざわついたが、レンブランが物怖じせず歩んでいくのを見て、落ち着きを取り戻した。

「勝手な真似をするな」

酋長は指示を出した男の頬を殴ると、男を睨み付けた。

「あの男が戦争を知らない？ ばか者が。あの男は過の戦争を終幕に導いた男の右腕だ」

酋長は振り返ると、持っている武器を捨ててみせた。

「和解を申し受ける。皆、武器を捨てよ」

酋長の言葉を聞き、兵士たちは武器を捨てた。そして、多くの者は安堵の表情を浮かべた。

酋長は皆が武器を捨て終わったのを確認すると、レンブランのほうへ歩いていった。

「酋長がこちらへ来ますよ」

「ああ。和解を受け入れてくれるようだな」

レンブランは穏やかに微笑んで酋長を迎え入れた。

「まず、先程の非礼を詫びたい」

「構わないさ」

レンブランはすぐに返答した。

「今まで拒み続けた和解をなぜ受け入れる気になったんだ？」

ユリウスが尋ねると、酋長はうつむいた。

「この戦、初めから勝てるものとは思っていなかった。村の者のた

めに少しでも良い条件を提示するため、最後まで抵抗させて頂いたのだ。しかし、これ以上の抵抗は無意味。無駄に犠牲者を増やすだけだ」

「賢明な判断だ。我々も争いは望まない」

レンブランは酋長の顔を上げた。

レンブランは酋長の話を聞いた。その上で、周辺植民地との差が出ない範囲で彼らの希望を受け入れた。そして、最後に今後は初めから話し合いによる解決を望み、二度戦争を起こさないことを誓わせた。

レンブラン国王によって無事和解案が成立した。それを祝い、コンサークル高原には墓石の中心に平和記念碑が建てられた。そこには大勢の人が訪れ、墓石へ花を添えると同時に祈りを捧げた。

「パパ。ここに僕と同じ名前が彫ってあるよ」

一人の子供は一つの墓石に駆け寄ると、その文字を指でなぞった。

「ああ。そこにはパパの親友が眠っているんだ。君の名前も彼の名前を取って付けたんだよ。私の知る中で最も勇敢な名前だ、カイ」
ひしゃげたロケットを胸に下げた男は足を引きずりながら歩み寄った。

「ラウル、肩に掴まって」

「ああ。ありがとう、ユウ」

二人は一步一步しっかりと歩み寄った。カイはその姿を見ると、二人に駆け寄ってラウルにしがみついた。

三人は墓石の前に膝をつくと、手を合わせた。

(遅くなってすまない。やっと花を添えられるようになったよ)

ラウルは花を添えると、穏やかな表情を浮かべた。

(……しかし、多くの犠牲の中で俺一人幸せになっていいのかな?)
ラウルは目を閉じると、心の中で問いかけた。すると、前触れなくロケットの蓋が開いた。

写真の中のカイが笑顔で答えてくれた気がして、ラウルもまた優

しく笑顔を浮かべた。

(ありがとう、カイ)

ラウルの穏やかな顔を見て、二人もつられて微笑んだ。

ラウルは自分のロケットを墓石に掛けた。

「じゃあ、もう行くよ。また来るから」

ラウルはユウの肩に掴まりながらゆつくりと立ち上がった。

それから三人は他の墓石にも花を添え、手を合わせて回った。

「私はこれからも大勢を殺めたことを悔いながら生きてゆくだろう。償いの道を探しながら生きてゆく」

ラウルは遠くを見つめた。

「つらい思いも多くさせるだろう。……こんな私を支えてくれるか？」

ラウルは不安げな表情でユウの顔を窺った。すると、ユウはニッコリと微笑んだ。

「もちろんです」

ユウの言葉を聞くと、ラウルは穏やかな表情を浮かべた。

「もう一人、会いに行くべき人がいるんだ」

ラウルは子供を抱えると、ユウの肩に手をかけた。すると、ユウは小さくうなずいた。

(ジェルド、私はジーク国王の想いを遂げることができただろうか?)

ラウルは空を見上げ、物思いにふけた。

「さあ、行きましようか？」

「……ああ」

雲ひとつない青空の下、三人は寄り添いながら歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8509d/>

戦いの果てに

2010年11月1日09時57分発行